

## ローマ帝国における臆卜師 (haruspices) の盛衰の諸原因

平 田 隆 一

## 序論 問題の所在

エトルスキ民族は古代地中海諸民族の多神教とは異なり、ユダヤ教やキリスト教と同様に啓示された教義を有した。その教義は『エトルスキ教典』(Etrusca disciplina)として書き留められており、エトルスキはこの教典に基づいて入念にト占や儀式を行った。このト占を担当したのが「臆卜師」haruspices(単数haruspex)であり、彼らは「臆ト占い」haruspicinaを行って神々の意向を探り、然るべき手当を講じた。エトルスキと同様に儀式と占いを重んじたローマ人は、共和政期にエトルスキのト占術を修得し、エトルスキの臆卜師を重用して、「60人臆卜師団」を組織し、『エトルスキ教典』をラテン語に翻訳した。エトルリアの諸都市国家は、前1世紀初頭にローマ国家に吸収され民族としての独立性を失ったが、帝政時代にもローマ帝国の諸都市で臆卜師が活躍し、キリスト教徒の迫害など重要な政策に関与した。しかしキリスト教が公認され、国教になるに及んで臆ト占いは禁止された。

独立期エトルスキの臆卜師および臆卜術については多数の研究があり<sup>(1)</sup>、研究者それぞれの観点から論述されてきた。筆者もエトルスキ宗教とローマ共和政国家の関係に関する諸学説を紹介しつつ検討し、そのさい臆卜術についても若干論及したが<sup>(2)</sup>、関連史料を綿密に考証するには至らなかった。

一方ローマ帝政期における臆卜師たちの活動は、従来それほど注目されなかったけれども、1990年代以降ブリケル、モンテロー、ハークなどにより精力的に研究が推し進められ

(1) A. Bouché-Leclercq, *Histoire de la divination dans l'antiquité, t.4 Divination italique : étrusque, latine, romaine. Index general*, Paris 1882 [Darmstadt 1978] (以下Bouchéとして引用); C.D. Thulin, *Die etruskische Disciplin, Teil I-III*, Darmstadt 1968 [1905, 1906, 1909]; G. Wissowa, *Religion und Kultus der Römer*, 1921<sup>2</sup> [1971], 543ff.; A. Grenier, *Les religions étrusque et romaine*, Paris 1948.; R. Bloch, *Les prodiges dans l'antiquité classique (Grèce, Etrurie, Rome)*, Paris 1963; G. Dumézil, *La religion romaine archaïque, suivi d'un appendice sur la religion des étrusques*, Paris 1966; M. Torelli, *Elogia Tarquiniensis*, Firenze 1975, 105ff.; J.A. Pfiffig, *Religio Etrusca*, Graz 1975 (= *Religio*), 44ff., 114ff., 139ff., 367ff. B. MacBain, *Prodigy and Expiation: a Study in Religion and Politics in Republican Rome*, Bruxelles 1982. なお以上の著書には、多かれ少なかれ帝政期の臆卜師に関する記述もある。

(2) 平田隆一「ローマ共和政国家とエトルスキ宗教 研究ノートから」『教養部紀要』(東北大学) 41 (1984)、214~234; 「古代ローマにおける宗教 王政・共和政時代の国家宗教と外来宗教」『ローマにおける宗教とそのかたち(続)』西洋史研究会 1997年、15~41。

(3) ている。ブリケルは、ローマ帝国が臍卜師を重用し「ローマ異教の最後の砦」と見なしたのは、エトルスキの宗教がイタリア伝来の宗教で成文化された『エトルスキ教典』を持ち、キリスト教に対抗しようとするような教義を本来の教典に加えていたからだとして主張し、彼らが最終的にキリスト教に敗れた要因として後述の4点を指摘した。他方モンテロは<sup>(4)</sup> セプティミウス・セウェールス以降の各皇帝が臍卜師にどう対応したかを分析して、彼らのト占の背後に元老院の利害があったことを析出し、臍卜術はキリスト教に最終的打撃を受ける前に新プラトン主義哲学者など他の諸々の異教に攻撃されて弱体化したと論定した。これに対しハークは<sup>(5)</sup>、こう反論する——臍卜術は各地に広まったけれども、純然たる道具としての役割を付与されていて、決まった範囲内に限定されていた。そして公的臍卜師は主導権を持たず、私的臍卜師は見立てを個人的問題に限らなければならなかった、と。

先に筆者は市民向けの公開講演会で、エトルスキの宗教がキリスト教に敗れた要因としてブリケルが挙げる諸点を検討し、私見を披瀝した<sup>(6)</sup>。しかし講演会での報告はその性格上概略的にならざるを得ず、そこで提示した見解も厳密な論証を経ていなかった。さらにモンテロおよびハークの書物はまだ入手していなかった。本稿の課題は、改めてこれらの学説を批判的に検討しつつ、本来エトルスキの臍卜師だった臍卜師が何故ローマ帝国において重用され、そして禁止されたのか、その原因を多面的に単に宗教的・政治的側面だけではなく社会・経済的側面からも共和政初期にまで遡って探究することである。かかる歴史的・多面的な考究は、以下の3点から必須であると考えらる。

エトルスキ臍卜師の機能・性格・出自が、ローマ国家との関わり合いの中で歴史の推移とともに何らかの変化を蒙ったことは、当然予想されるので、問題の解明には、それらがエトルリアとローマでどのような変遷をたどったかを明確にしなければならない。その前提として、予め本来のエトルスキ臍卜師の実態を把握することが肝要であり、またそのような変化を検証するには、エトルスキ宗教の特質ないし特徴を把握しておく必要がある。かかる観点から本稿では、エトルスキ臍卜師とローマとの関わりが始まった共和政初期にまで遡って、本来の臍卜師の機能・性格・出自がどのように変貌したかを考証する。

ローマ宗教を支える社会的基盤として次の5つの層があると考えられる。即ち、下層から上層への順に、(a) 個人、(b) 家、(c) 何らかの団体ないし共同組織、(d) 都市(国家)、

---

(3) D. Briquel, *Chrétien et Haruspices. La religion étrusque, dernier rempart du paganisme romain*, Paris 1997 (= *Chrétien*) ; *La civilisation étrusque*, Paris 1999 (= *La civilisation*), 242f., 265ff.

(4) S. Montero Herrero, 'Neoplatonismo y haruspicina : historia de un enfrentamiento', *Gerión*, 6, 1988, 69-84 ; 'Papa Inocencio I ante las tradiciones religiosas paganas', *Cristianismo y aculturación en tiempos del Imperio Romano*, Antig. crist. (Murcia) VII, 1990, 405-412 ; *Política y adivinación en el Bajo Imperio Romano : emperadores y haruspices (193 D.C.-408 D.C.)*, Bruxelles 1991 (= *Política*).

(5) M.-L. Haack, *Les haruspices dans le monde romain*, Scripta antiqua 2003. (なお id., *Prosopographie des haruspices romains*, Firenze 2006 は筆者未入手)。

(6) 「エトルスキの宗教とローマ帝国」『東北学院大学オープン・リサーチ・センター(ヨーロッパ)研究プロジェクト報告書・ヨーロッパ・グローバリゼーションと諸文化圏の変容』(2008年3月)、214ff.

(e) 国家ないし帝国である。各層における崇拜ないし礼拝の対象は、(a) 個人の守護神たる genius など、(b) 家代々の祖先の霊もしくは祖先神、竈の神など、(c) 例えば集落あるいは教会等が崇拜する共通の特定の神、(d) 都市(国家) 独自の守護神、(e) 国家ないし帝国の至高神およびそれに連なる神々、である。これらのうち個人的崇拜を超越した公的礼拝が要求される神々ないし神は (d) と (e) であり、(d) の都市(国家) 守護神の祭礼には市民の参加が求められ、少なくともその祭礼を侮蔑したり拒絶することは許されない。(e) は国家ないし帝国が統治の必要上設定した国家神であり、国家・帝国による祭儀を伴い、これに異を唱えることは国家・帝国への反逆と見なされる。ローマ宗教の社会的基盤が以上のものであったとすれば、エトルスキの臍卜師がローマ国家ないし帝国のレヴェルだけではなく、(a) ~ (d) の各レヴェルにおいてローマ社会とどう係わったのかが問われよう。とりわけ、個人を包摂して社会を構成する基層である家との関わりが、問題解明のための重要なポイントになるであろう。

従来の通説によれば、原始キリスト教は幾度もの迫害に耐えたのち、初のキリスト教徒の皇帝たるコンスタンティヌス帝によって公認され、テオドシウス帝により唯一の国教と認定されて、異教に対し全面的な勝利を収めたとされる。しかし最近の学説では、そのような発展路線は事実と反するとして排斥され、そして国教と認定される以前には様々なキリスト教が存在し、<sup>(8)</sup> これらの諸キリスト教の間の競争を勝ち抜いた宗派が唯一正統なキリスト教として国教とされたと論定される。またキリスト教はコンスタンティヌス帝以前にすでに公認されており、同帝はそれを確認したにすぎず、彼自身は古来の多神教を信奉する「異教徒」であつて、<sup>(9)</sup> 異教はその後も テオドシウス以降も 存続したと主張される。<sup>(10)</sup> 他方、多くの「異教」も概して一神教に傾斜を帯びる傾向があり、<sup>(11)</sup> 伝統的宗教は衰退していった。<sup>(12)</sup> このような宗教的・政治的状況を踏まえた上で、臍卜師がキリスト教とどのように係わったのかを問題とすべきであろう。

---

(7) P. Turcan (translated by A. Nevill), *The Gods of Ancient Rome. Religion in Everyday Life from Archaic to Imperial Times*, Edinburgh, 2000, 14ff. は、家の宗教から叙述を始めている。Cf. Ph.F. Esler, 'The Mediterranean context of early Christianity'; in: Ph.F. Esler (ed.), *The Early Christian World, I-II*, New York 2000 (= *Christian World, I, II*), I, 15f.

(8) S.E. McGrinn, 'Internal renewal and dissent in the early Christian world'; in: *Christian World*, II, 893-906.

(9) 例えば E. Lehmeier und G. Gottlieb, 'Kaiser Konstantin und die Kirche'; in: H. Schlange-Schöningh, (Hrsg.), *Konstantin und das Christentum*, Stuttgart 2007 (= *Konstantin*), 166f.によれば、コンスタンティヌス大帝は pontifex maximus としてニカイアの公会議に臨席し、その後帝の宗教観、宗教的機能は変わらなかった。

(10) R. McMullen, *Christianity & Paganism in the Fourth to Eighth Centuries*, New Haven and London 1997; P. Hadot, 'La fine del paganism', in: H.-C. Puech (ed.), *Le religioni nel mondo antico*, Paris 1987, 293-326.

(11) P. Athanassiadi and M. Frede (ed.), *Pagan Monotheism in the Late Antiquity*, Oxford 1999 (= *Pagan Monotheism*) 所収の諸論文、特に P. Athanassiadi and M. Frede, 'Introduction', 1-20 と M.L. West, 'Towards Monotheism', 21-40. Geerlings, Illinger (Hrsg.), *Monotheismus Skepsis Toleranz*, Tournhout 2009 (= *Monotheismus*) 所収の諸論文参照。

(12) J. Geffcken, *Der Ausgang des griechisch-römischen Heidentum*, Heidelberg 1929, 20ff.

## エトルスキの臍卜師

エトルスキ臍卜師の実態解明に先立って、まずエトルスキ宗教の主要な特徴とみられる点を摘記する。

創唱宗教 伝承によると、タルクイニーの農夫が畑を耕していると、土の中からタゲス (Tages) と呼ばれる、古老の知恵を持つ神童が現れ、集まってきたエトルリア中の人々に教えを垂れたという。この伝説による限り、エトルスキ宗教は多神教でありながら、ギリシアやイタリア諸民族の自然宗教とは異なり創唱宗教ということになる。

書かれた教典 タゲスの言葉を教義として書きとめたのが、ラテン語で “Etrusca disciplina” 『エトルスキ教典』と呼ばれる3部から成る文書 libri haruspiciini 「臍卜の書」、libri fulgurales 「雷電の書」、libri rituales 「儀式の書」<sup>(14)</sup> である。しかし実際には、この教典はローマ帝政期にかなり改訂されている。

神々の坐 エトルスキの神々はティンまたはティニア (Tin / Tinia) を主神とし、独自の役割を与えられていた。彼らは16の区に分割された宇宙 天空と地下 にそれぞれ固有の座を有し、これらの座は動物の内臓、特に肝臓に投影され、その特定の部位に定置された。従って大宇宙に住む神々の意向は、小宇宙たる肝臓によって窺い知ることができると考えられ、ト占のためエトルスキの臍卜師は主として肝臓を用いた。<sup>(15)</sup>

主神と隠れた神々 神々には序列があって、主神ティニアは3つの雷を保有した。しかしティニアが自由に投下できる雷は一つだけで、もう一つは12柱の「同意する神々」の承認が必要であり、そして国家の命運に関わる最も重要な3つ目の雷を投下するには、より上位の「隠れた神々」の同意が不可欠だった。これらの隠れた神々は運命を司るが、人数や性別は不明であり、その名前を口にすることは禁じられていた。<sup>(16)</sup> つまりティニアは全ての神々に君臨する絶対的な至高神ではなかった。またウォルシニーの守護神ウォルトウムナ (Voltumna, Vertumnus, Vortumnus) は、「エトルリアの主神」と称されている。しかしウォルシニーはエトルスキ12都市国家連合の拠点であり、そのためこの都市国家の守護神がエトルスキ民族の統合を象徴する神と見なされたのである。従ってウォルトウムナは、実際には民族全体の最高神とは認められず、しかも前264年にローマに搬出されてしまった(なお、ウォルトウムナはローマの神としてその後500年以上も崇拜された。)

宿命論 エトルスキは個人的にも民族としてもこれらの神々を信じ、神々の意向には唯々諾々と従うしかないと考えた。何であれ神が定めたことは、延期は出来ても回避や変更は不可能だった。<sup>(17)</sup> 全

(13) Colum. X 346. Cf. O.W. von Vacano, *Die Etrusker. Werden und geistige Welt*, Stuttgart 1955, 66ff.

(14) Thulin, *Disciplin*, I, 1ff.; Pfiffig, *Religio*, 36ff.; Briquel, *La civilization*, 234ff. なおこの他に libri achelontici と libri fatales があり、いずれも libri rituales に含まれる。

(15) Thulin, *Disciplin*, I, 1ff.; II, 1ff., 106ff.; Pfiffig, *Religio*, 115ff., 127ff., 150ff.

(16) エトルスキの神々については、M. Pallottino, 'Deorum sedes' (1956), in: id., *Saggi di antichità*, II, Roma 1979 (= *Saggi*), 779ff.

(17)  
盛期には 墓の壁画に見られるように 人生を謳歌するようなところもあったが、少なくとも  
衰退期には如上の宿命論が支配的になった。

ト占と儀式順守 エトルスキの臍卜師は重要事項についてト占によって神意を伺い、  
儀式や祭礼を厳格に励行した。このように儀礼を順守したために、彼らは古代において「最  
も宗教に専心する民族」(Liv., 5, 6) と評された。儀礼の目的は神々を宥め、「神々の平和」  
を保持すること、その結果として地上の平和を保つことだった。<sup>(18)</sup>

目的論的思考 エトルスキ人は自然現象を目的論的に解釈した。セネカ (Seneca, *Q. Nat.*, 32) によれば、「我々 (ローマ人) は雲が衝突したので稲妻が発生すると考えるが、  
エトルスキ人は稲妻が発生するように雲が衝突すると信じている」のである。

saeculum エトルスキ人は、個々の人間に寿命があるように国家や民族にも寿命があ  
り、エトルスキ民族には寿命として 10 個の saeculum が与えられていると信じていた。<sup>(19)</sup> 1 sae-  
culum は大抵の場合ざっと「100 年間」つまり「1 世紀」だった。彼らの見解によれば、人  
間も国家もその寿命を多少は延長できても、定められた宿命は逃れられないのである。

エトルスキ宗教のこれらの特徴を念頭に置きつつ、まずエトルスキ語の碑銘文史料を中  
心に臍卜師の実態について考察する。

ところで、「臍卜師」と訳出したラテン語 *haruspex* は、*haru-*と*-spex* の合成語である。  
*-spex* は *auspex* < *avis-spex* (原意「鳥を見る人」から「鳥卜官」) に見られるように、紛れも  
なくラテン語であるが、*haru-*はラテン語では解釈できず、その本来の意味についてはい  
くつかの仮説が提唱されている。<sup>(20)</sup> 本来の意味はどうあれ、エトルスキ臍卜術の実態に即  
して言えば、肝臓が主であるが肺臓や心臓などの内臓器官もト占の手段とされているので、  
「肝臓占い師」あるいは「腸卜師」よりは一般的に「臍卜師」と訳した方が適切であろう。

この *haruspex* を含むラテン語碑文は、100 点ほど出土しているが、<sup>(21)</sup> エトルスキ語と併  
記されているのは、古代ウンブリア地方 (*ager Gallicus*) のペザロで出土し前 1 世紀の第  
4 四半世紀に編年される次の 1 点のみである。<sup>(22)</sup>

(1) Um 1.7 [L. CA]FATIUS. L. F. STE. HARUSPE[X] <sup>2</sup> FULGURIATOR  
<sup>3</sup> *cafates. lr. lr. net vis. trutnvt. frontac.*

このラテン語・エトルスキ語併用文のうち、ラテン語の方はとりあえず「ル(キウス)・

---

(17) R. Bloch, 'Liberté et déterminisme dans la divination romaine', in: M. Renard, et al. (ed.), *Hommage à Jean Bayet*, Bruxelles-Berchem 1964 (= *Hommage*), 89-100. Bouché, 81ff.によれば、彼らは宿命を予知して回避した。

(18) Thulin, *Disciplin*, 1ff.; Pfiffig, *Religio*, 103ff.

(19) Bouché, 85ff.; Thulin, *Disciplin*, 63ff.; Pfiffig, *Religio*, 159ff.

(20) 古代人にとって *haruspex* は "inspecteur de l'autel" か "inspecteur de la victime" だった (Bouché, p.62, n.1). Cf. Walde-Hoffmann, *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg 1965<sup>4</sup>, I, 365f. ("Eingeweideschauer").

(21) Thulin, 150-1; Briquel, *Chrétiens*, 28-40; また Torelli, 122-4 も参照。

(22) 以下でエトルスキ語の引用は、記号・番号とも H. Rix, *Etruskische Texte. Edtio minor*, I-II, Tübingen 1991 (= *ET*)による。

カファティウス、ル(キウス)の息子、ステ(ラティーナ区)、臆卜師、雷卜師」と訳出できる。エトルスキ語の人名部分は、ブラエノーメンが氏族名の後に来ているだけでラテン語と同じであり、語順通り訳せば「カファテス・ラ(リス)、ラ(リス)の(息子)」となる。問題となるのは次の3点である。

*FULGURIATOR* は普通の語形では *fulgurator* であるので、両者はどう異なるのか。

ラテン語では2語の *HARUSPE[X] FULGURIATOR* が、エトルスキ語では3語で表されているので、*haruspex* に相当する用語が *net vis* だけなのか、あるいは *net vis trutnvt* の2語なのか。

*frontac* の最初の母音を表す文字 *o* は、エトルスキ語碑銘文においてはこの個所でだけ使われている唯一の用例である(エトルスキ語では *o* と *u* の発音は区別されず、他所では文字としては *u* だけが用いられている)。

*net vis* と *trutnut* という単語はそれぞれ碑文(2)と(3)では単独で用いられている。

(2) Cl 1.1036 *nae cicu<sup>2</sup> pe nal<sup>3</sup> net viś* (クルーシウム出土)

人名部分は「ナエ・キク、ペトニ(の息子)」と訳せる。

(3) TA 1.174 *apries. ar. v<sup>2</sup>. trutnu* (タルクイニー出土)

人名部分は「アプリエス[氏族名]・アル(ント)、ウ(エル)ト(ウル)(の息子)」と訳せる。

さて、(2)の *net vis* が *haruspex* を表すことはほぼ確実視されているので、<sup>(23)</sup>*FULGURIATOR* に相当する用語は *trutnvt frontac* ということになる。しかし(3)で *trutnu* は単独で用いられており、これだけで *FULGURIATOR* ないし *fulgurator* を意味すると解釈できるし、<sup>(24)</sup>またそう解釈すべきであろう。とすれば、問題は *frontac* の正確な綴りと意味ということになる。筆者は文字 *o* が全く例外的な用例であることを重視して、これは <sup>(25)</sup>の真ん中の点が欠損したか単なる誤記であると見なし *f(a)r n(a)tac* と補読し、ここに *far na e* と同じ語幹 *far n(a)-* が認められると考える。*far na e* はヴルチの石棺の蓋に刻まれた人名とともに現れ (*Vc* 1.64 ; 1.92 ; 1.93)、筆者はそれを埋葬の状況から「埋葬された」と訳した (*- e* が動詞の受動完了形を表す接尾辞であることはほぼ確定的である)。<sup>(26)</sup>*far n(a)-* が「埋める」を意味する形容詞ないし分詞なら、*f(a)r n(a)tac* は「埋める(人)」を意味すると想定できよう。

ところでブロックによれば、*fulgurator* には2つの意味 「雷卜師」と「雷を引き寄せ

23) D.H. Steinbauer, *Neues Handbuch des Etruskischen*, S. Katharinen 1999, 449 ; G.M. Facchetti, *L'enigma della lin gua etrusca*, Roma 2001<sup>2</sup>, 257 ; J.A., Pfiffig, *Die etruskische Sprache*, Graz 1969 (= *Sprache*), 279f.

24) Steinbauer, 482 : "Blitzdeuter" ; Facchetti, 104 : "scrutatore (del fulmine)". これに対し Pfiffig, *Sprache*, 289 : "sakrales Amt".

25) M. Buffa, *Nuova raccolta di iscrizioni etrusche*, Firenze 1935, n.1150 は *frnta* と読み、H.L. Stoltenberg, *Etruskische Namen für Personen und Gruppen*, Leverkusen 1958, 55 はこれを正しいと評価 ("Opferpriester"). Steinbauer, 195f., 421f. は、*F(e)rxtac* と読み、ラテン語のトリプス名 *Stellatina* に対応するかも知れないとする ("ferentinus"). Pfiffig, *Sprache*, 289 は *frontac* を *fulguriator* と比定する。

(26) 平田隆一 『エトルスキ国制の研究』南窓社、1982年 (= 『国制』)、33。

る人」があり、fulguriator は fulgurire から派生したので後者を意味し、(1)のラテン語 FULGURIATOR が 2 行目の真ん中に一語だけ記されているのは、この人物が雷を引き寄せる稀有の能力を持っていたからである<sup>(27)</sup>（実際かかる能力を主張する臆ト師がローマ帝政末期に存在した [後記 27 頁]）。もしここで FULGURIATOR が「雷ト師」ではなく「雷を引き寄せる人」を表すのなら (haruspex 「臆ト師」は普通「雷ト師」を兼ねているので、両者を併記するのはむしろ奇妙に思われる)、frontac = f(a)r n(a)tac は「雷を埋める (人)」という意味で trutinvt を限定し、両者でもって「落雷させる臆ト師」を表すと把握されよう。

碑文(1)と(2)で言及された臆ト師は、碑文(3)の「雷ト師」と同様にプラエノーメンと氏族名 (家族名) に加えて父名も掲示しており、これはエトルスキの墓碑で政務官が言及される場合の公式な人名表記法である<sup>(28)</sup>。(1)の cafa(s) はクルーシウムとペルージャでかなり頻出する家族名であり、カファテ家は当地の有力者であったと推定される。しかしこの一族から政務官が輩出したことを示す記録は現存しない。

注目されるのはむしろ、この石碑が本来のエトルリアでなくエトルリア外のペザロで出土し、前 1 世紀の最後の四半世紀に編年されることである。この時期にクルーシウムもペルージャも、もはやかつての独立の都市国家ではなく、ローマ国家に属する地方自治都市であった。碑文が発見されたペザロ (ラテン語で Pisaurum) はすでに前 184 年にローマ市民植民市として建設されていたが<sup>(29)</sup>、前 1 世紀末にここでラテン語とエトルスキ語が併用されたということは、当地に移住していたクルーシウムないしペルージャの有力氏族が臆ト師として活躍していたことを物語る。この事実と「ピアチェンツァの肝臓」の検討結果を基にして、一般的に次のように推論できる 即ちローマ帝政の最初期にエトルスキの臆ト師はエトルリアを越えて、イタリア各地の自治都市で公式にト占活動を行っていたと。彼らは以下で考察する諸点から判断して、恐らく「都市臆ト師」であって、ローマ帝国から派遣された臆ト師ではなかったと考えられる。

一方(2)において、nae はリックスによれば (ET, ad tit.)、cneve はラテン語の Gnaeus であり、クルーシウムで典型的なプラエノーメンではない。また家族名 cicu の例証はさほど多くないので、同家はその都市でそれほど有力な家柄だったとは見なし難い。他方 pe nal は男性形家族名 pe na の属格ではなく、女性形家族名 pe ni の属格と把握される。何故なら人名定型において父称は父のプラエノーメンだけを用いるのが通例であり、家族名の使用は母称の場合に限られるから<sup>(30)</sup>。だとすれば、ナエ・キクの人名構造は父称を欠き母称だけということになる。家族名 pe na は殆どクルーシウムだけでかなり頻出する家族名であり、ペトナ家は当地の有力者であった可能性が高いが、母称だけの記載は、母方

(27) Bloch, *Les prodiges*, p.150-1, n.2; MacBain, 51f.

(28) 平田 『国制』、270。

(29) *Kleine Pauly*, 4, 868.

(30) 平田 『国制』 269ff.; 同「古典古代における女性の地位：エトルリアの場合」『国際文化研究の発展に向けて』東北大学国際文化研究科、2000 年、115 頁以下。

(ペトナ家)の方が父方(キク家)よりも有力な家柄だったためだろうか。ともあれナエ・キクが内臓占いに関わったことは紛れもない事実である。この碑文の年代は「後期」(前450年～前1世紀)とだけ判定され、詳細は皆目分らない。キクおよびペトナー族の誰であれこの都市国家で政務官を務めたという史料は現存しない。

臆ト師が都市国家の有力者であったにも拘らず政務官でなかったことは、次のタルクイニー出土の碑文(前2世紀)によって確認できる。

(4) T 1. 17 *l(a)ris. pulenas. larces. clan. lar al papacs. <sup>2</sup>vel urus. nefts. prumts. pules. larisal. creices <sup>3</sup>ancn. zi . ne rac. acasce. creals. tar nal . spu<sup>4</sup>rem. lucairce. ipa. ru cva. ca as. hermeri. slica em. pa anac. alumna e hermu* (以下省略)。

ここで冒頭の2行は、石棺の蓋に横臥して文字(当該碑文)が刻まれた巻物を繰り広げている人物の名前、即ち「ラリス・プレナス、ラルケの息子(*clan*)、ラルトの *papacs* <sup>(31)</sup>(甥)、ウェルトウルの孫(*nefts*)、プレ・ラリス・クレイケ〔ギリシア人ラリス・プレ〕の曾孫(*prumts*)」である。

この人物ラリス・プレナスは3代遡って自分の家系を誇示し、しかも曾祖父がギリシア人であることを最後のコグノーマン *creice-s* (ラテン語 *Graecus* に相当する)によって明示している。曾祖父まで遡って家系を記載した墓碑銘は、エトルリアでは他に例がない。彼は古来の名家ではないけれども、タルクイニーに移住して当地の有力者になったことを誇示したかったのであろう。3行目の *ancn. zi . ne rac. acasce.* において *ne -rac* は *net -vis* と同一の語幹を有しているので、間違いなく「内臓」に関わる意味を持っており、そして *-rac* を「占い」と解すれば、*zi* が「書く、書物」という概念を表すことは確定しているので、当該部分は「彼はこの (*an-cn*) 内臓占いの書 (*zi*) を作成した (*acasce*)」と訳出できる。この解釈が正鵠を射ていれば、*zi ne rac* はラテン語で *libri haruspicini* と訳された書物と同定され、プレナスはその一部を執筆したということになるであろう。彼が臆ト師だったとは明記されていないけれども、手にしている臆ト書を自ら作成したと称している以上、臆ト師だったと認定して差し支えなからう。

これに続く個所で確実に読み取れるのは、ラリス・プレナスが「タルクイニーで (*tar -nal*) 都市国家を (*spurem*) 治めた (*lucair-ce*)」、そして「カタ *ca a-s*」と「パカナ *pa ana-c*」という神に関わったことだけである。カタは太陽神と考えられ、パカナは *Bacchus* に由来する神名であり、*spur-*はほぼ確実に「都市国家、都市」を意味し、*lucair-ce* は「治めた、統治した」—むしろ「君臨した」—を表す (*-ce* は動詞過去形で、語根 *luc-*は「王」を意味する <sup>(32)</sup>エトルスキ語由来のラテン語 *lucumo* と同根の可能性がある)。従って彼がタルクイニーで宗教

(31) J. Heurgon, 'Influence grecque sur la religion étrusque : l'inscription de *laris pulenas*' (1957), in : J. Heurgon, *Scripta Varia*, Bruxelles 1986 (= *Scripta*), 369 : "Larthis fratris filius". これに対し Steinbauer, 451 "Enkel"; Pfiffig, *Sprache*, 298 "Enkel".

(32) ただし「王」そのものを意味するのではない(平田『国制』131頁)。



的な大権を保持していたことは疑問の余地がない。引用文最後の単語 *hermu* の後に約 30 語が続くが、この省略した個所の確実な解釈は殆ど不可能であり、彼が記した「臆ト書」の内容はこれ以上究明できない。ただし彼が その宗教的大権にも拘わらず 当地の主要政務官職 (*zila* , *pur* , *maru*) に就任したことを示す記載は見出せない。

ウルゴンは、<sup>(33)</sup> トゥスカニアで実証される政務官職 *maru pa a uras ca sc* (AT 1. 32) 「バッカナーリスとカタのマル」と関連づけて、ラリス・プレナスはバッカナーリスとカタの神官であって都市の *rex sacrorum* 「祭儀王」だったと見なしている。ここに *maru* や *cepen* といった称号は見当たらないが、*lucair-ce* に想定した「君臨した」という意味から言って、彼は実質的に *rex sacrorum* の役割を果たしたと推断できよう。もっとも彼に先立つ 3 代にわたるプレナス家の歴史において、一門の誰かが上記の諸官職のどれかに就いたことを実証する碑銘文は残されていない。ともあれ以上の考察により、この臆ト師がたとえ古来の名門の出ではなかったにせよ都市国家タルクイニーの有力者であり、正規の政務官ではなかったけれども臆ト師として政治に介入できたことは明白である。

一般的に言って、エトルスキ社会において臆ト師は責任を伴う名誉ある地位にあったと評定される。というのは公式に臆ト師として勤務するには、『エトルスキ教典』を十分にマスターするなど相当の研鑽を必要としたに違いなく、また後述のように、彼らには単に宗教的な知識や技術だけではなく、様々な分野、とりわけ軍事に関する幅広い知識と的確な現状分析能力も求められたから。そのため近隣諸民族、特にローマとの戦争が絶え間なかった時期に、エトルスキ都市国家の臆ト師にはかなり長期にわたる修学を援護する相当の経済力が不可欠であり、それほどの経済的余裕を持ちえたのは、貴族もしくは裕福な平民だけだったろう。従ってその職掌は、貴族ないし有力者の家で代々受け継がれたと考えられる。

ラリス・プレナスの場合、もしウルゴンの考証通りこの碑文の作成年代が前 200 年頃な<sup>(34)</sup>ら、それはタルクイニーがローマの同盟国としてハンニバル戦争を戦い抜いた直後である。従ってプレナスは疑いもなくこの大戦を経験しており、ひょっとすると臆ト師としてローマ軍に同行した可能性もある。もしそうなら、タルクイニーにおいて彼が絶大な威信を發揮しえたのは、最終的に勝利に輝いたこの戦争におけるそのような軍事的体験に裏打ちされたからかも知れない。

以上挙げた 2 つの単語の他に、*net* - を語幹とする用語はエトルスキ語碑銘文中に見出せない。しかしながら、恐らく臆ト師が関与したと推定される儀式に関する史料が残されている。即ち、何月何日にどの神にどんな供犠を捧げるべきことを内容とする文書「亜麻布の書」(=LL) と、いわゆる「カプアの瓦板」=TC) である。注目されるのは、現存するエトルスキ語資料の中で最も多くの語数 (約 1500 語) を含む「亜麻布の書」に、数回に

---

(33) Heurgon, 'Influence...' ; 366ff.

(34) Heurgon, 'Influence...' ; 364 ; id., *La vie quotidienne chez les Etrusques*, Paris 1963, 292.

わたり出てくる *śpureri me lumeric* という語句 (例えば LL 6) である。この文書は その作成年代は不明であるが エトルスキの祭事暦を記述したものであり、*śpur-eri* はほぼ確実に「都市国家 (*śpur*) のために (-*eri*)」と解釈され、*me lum-eri-c* は「そして(-*c*) *me-lum* のために (-*eri*)」訳される。ここで *me lum* は *śpur* と対になっているので、都市(国家)と対比されるような公的組織体を表すことは確実である。*me lum* の意味については諸論があるが、それが *śpur* の後で言及されていることと、都市国家より上位の組織体たる「連邦」ないし「連合」には別なエトルスキ語 (*me -l*) が想定されることを顧慮すれば、*me lum* は *śpur* の下部組織 (地方自治体) だったと推定できる。<sup>(35)</sup> この推定が的外れでなく、そしてここで言及された儀式に臍卜師が関与していたならば、彼は都市国家のみならずその下部組織体においても公務として卜占を行ったことになる。

エトルスキ語碑銘文史料の他に、考古学史料からも若干ながら知見が得られる。

臍卜師による卜占の手段は、本来的には動物の内臓、主に肝臓であるが、ヴルチ出土の鏡の裏面に肝臓を検視している男の像が線刻されており、*ar as* (Vc S 10) という名前が添え書きされている。この名前はギリシアの占い師の名前 Karchas からの借用語なので、これによって *ar as* の出自や社会的地位・役割を割り出すことはできない。

ところで臍卜師は、肝臓のどの部位に異常があるかによって供犠を行うべき神を特定するが、多数の神々の名前が刻まれている青銅製の肝臓の模型 (Pa 4.2) が実際にピアチェンツァ (プラケンティア) で発掘された (いわゆる「ピアチェンツァの肝臓」)。<sup>(36)</sup> この模型は臍卜師を教育・養成するための器具と考えられるが、このような臍卜師の養成は私見ではエトルスキ自身のためというより、ローマのために行われた公算が高い。その根拠は以下の通りである。

この肝臓模型の正確な作成年代は確実に前 218 年以降、恐らく前 2 世紀中頃に設定される。それが出土したプラケンティアのあるポー河流域 (ガリア・キサルピ・ナ) にはエトルスキが「12 都市国家」を建てたと伝えられるが、前 5 世紀にガリア人がこの地を占領して支配し、その後このガリア人をローマ人が征服して、前 218 年にプラケンティアをラテン植民市として建てた。<sup>(37)</sup> しかしこの年にハンニバルがアルプスを越えて北イタリアに侵入し、以後約 20 年間イタリア半島で戦争が続いたので、この期間にポー河流域にエトルスキが敢えて再移住することはなかったであろう。従ってエトルスキが再びこの地方に移住した時期は、ハンニバル戦争がローマの勝利に終わった後、即ち前 2 世紀に入ってからで

---

(35) 例えば Steinbauer, 320f., 444 : “Stadtgebiet” ; Pfiffig, *Sprache*, 238, 295 : “Gau” ; Facchetti, 271, 277 : “popolo” .

(36) 平田隆一「エトルスキ語の解明を巡る若干の問題 zila me l rasnal「エトルスキ連合長官」の再検討を中心に」『ヨーロッパ文化史研究』(東北学院大学文学研究科)、5 (2004)、51ff.

(37) Pallottino, ‘Deorum sedes’ ; Pfiffig, *Sprache*, 121ff.

(38) ポー河流域のエトルリア文化圏の歴史については、S. Steingraber, *Etrurien : Städte · Heiligtümer · Nekropolen*, München 1981, 534ff.

ある。件の肝臓模型は、ローマが前2世紀中頃海外進出に伴い臆卜師を大勢必要とするようになった時期に作成されたと考えられる。

これより先、ローマとの最後の決戦 前295年のセンティヌムの戦いで敗れた後、エトルリアの諸都市国家はローマの同盟国として、外政・軍事はローマの方針に従わざるをえなくなった。そのため都市国家内における臆卜師の公的役割は大幅に減少し、例外的な場合を除き、内政に関するト占と天変地異等の予兆の解釈に限定されたに違いない。そのような時にローマが「60人臆卜師団」を創設すると、エトルスキ都市国家は自国内部での需要よりもローマにおける需用に応じて臆卜師を提供しなければならなり、エトルリア近隣の植民市でも臆卜師の養成が行われるようになったと考えられるのである。

前91年に同盟市戦争が勃発すると、臆卜師は独立都市国家としての命運をかけたト占を行ったはずであり、その結果はローマへの忠誠、即ちその提案を受け入れローマ市民になるということであった。換言すれば、エトルリア全体がローマ国家に併合されて各都市国家は国家としての独立性を完全に失ってローマ国家の自治都市となり、エトルスキは独自の民族としては消滅するというに他ならなかった。事実、同盟市戦争後エトルリアのローマ化が急速に進み、後1世紀の20年代までに、エトルスキ語は公式には使われなくなった。<sup>(39)</sup>『エトルスキ教典』のエトルスキ語原文はまだ湮滅はしなかったものの、<sup>(40)</sup>すでにエトルリアにおいてもラテン語が使用されたので、エトルスキの臆卜師も公式にはラテン語版教典を用いたに違はなく、今や名実ともにローマの臆卜師となったのである。

それどころか、ローマの臆卜師はもはやエトルリア出身である必然性はなくなり、知識・技能さえ確実にさえあれば、他民族出身者でも構わなかった。なるほどエトルリアの由緒ある有力な家柄出身の臆卜師が尊重されたかも知れない。しかしそれは必要条件ではなかった。こうしてエトルスキの臆卜師は、本来の家柄を頼りすることは出来にくくなり、またかつて所属していた都市国家との関係が希薄になった。前掲(1)のラテン語・エトルスキ語併用碑文は、まさにエトルスキ語からラテン語に、エトルリアの臆卜術からローマ・イタリアのそれに移行していく時期に作成されたのである。

さて、ヴルチで発見された「サティエスの墓」の内部の壁には、立派な身なりした男が脇にいる少年に飛ばさせた鳥を観察している絵が描かれている。男の名前は *vel saties* 「ウェル・サティエス」(Vc 1.19) で、明記されていないが彼は臆卜師だったと考定される。というのも、鳥の飛び方 飛翔の方向など によって占いを行うのも臆卜師の役目だったから。彼の家族名 *saties* は、ヴルチではかなり知られた名前であり、彼がヴルチの有力者だったことを察知させる。その壁画には彼の名前の他に、脇にいる少年の名前 (*arnza* : Vc 1.20) しか記されていないので、彼がどういう資格でそのト占を行ったのか、個人的にか

---

(39) Pfiffig, *Sprache*, 7.

(40) J. Kaimio, 'The Ousting of Etruscan by Latin in Etruria,' in: P. Brun et al. (ed.), *Studies in the Romanization of Etruria*, Rome 1975, 102ff.によれば、エトルスキの臆卜師は後363年にエトルスキ語の本を読んでいたという。

国家の要請によってなのかは不明である。少なくとも彼は政務官ではなかった。

実はエトルリアには宗教担当の政務官として複数の *maru / marunu* がおり、宗教関係の職務を分掌していた。<sup>(41)</sup> 例えば *marunu pa ana i* は、*pa a* 即ち Bacchus に関わる *maru* である。この *maru* 政務官団を統率するのが、*zilc marunu va* である (*zilc* または *zila* は国務全般を管轄する任期 1 年の政務官)。また *marunu spurana cepen* は、「都市国家のマル神官」を表し、恐らく都市国家最高の宗教担当政務官だった。この *cepen* (または *cipen*) という単語は他の用語を伴わず単独でも用いられ、この場合には祭儀や儀礼を担当する一般的な「神官、祭官」と比定される。マル政務官団に所属しないこのような神官「ケペン」は、公式の国家政務官ではなく、従って政治的権限は保持しなかったと推定される。このマル政務官たるケペンやそうでないケペンが、エトルスキ語の碑銘文中にかなり頻繁に実証されているのに対し、先に見た通り *net vis* 「臍卜師」は 2 回、*trutnvt (frontac)* 「雷卜師 (落雷させる臍卜師)」も 2 回しか実証されていないので、この例証の頻度から判断しても、両者とも都市国家の政務官ではなく、また恐らく公式の神官職にも所属しなかったと推断できる。

では何故、雷卜師を含む臍卜師は、その重要性にも拘らず正規の官職組織に編成されなかったのだろうか。その理由は次のように考えられる。

即ち、臍卜師になるには長年にわたる研鑽が必要だったことである。臍卜師がト占を行う手段は様々あり、<sup>(42)</sup> 何よりも動物の内臓であるが、使用される犠牲獣 (羊や山羊等) の内臓 主に肝臓、他に心臓や肺等 について、彼はその形や色を檢視し、それから特定の神に所属する細分化された部位に異変があるかどうかを調べる。部位と神との関係は、前述の肝臓模型の記載 (Pa 4.2) によって明らかなように複雑であり、そして神の性格に応じた供犠を厳密に執り行う手筈を整えねばならず、同時にまた『亜麻布の書』や「カプアの瓦板」に見られるような年間の祭儀について熟知していなければならない。次に雷で占う場合には、雷卜師は雷鳴の方角や稲妻の形、また落雷の場所を観察し、それがどの神から発信された情報なのかを正確に判定してその神託を読み取り、然るべき対策を提言しなければならない。また鳥の飛翔によって占う時には、臍卜師はどんな種類の鳥がどの方角からどの方角に飛んでいくのかを観察し、神々の意向を窺知する。最後に、洪水、飢饉、落雷等の予兆があった場合には、その原因を解釈し、然るべき手当を指示する。以上のように微妙で特殊な事項を完全にマスターするには、かなり長期の学習と修行が不可欠であろう。

さらにまた、ト占の結果が国政運営を左右し、特にローマとの軍事的対決が必至になっ

---

(41) 平田 『国制』、276ff.

(42) Thulin, *Disciplin*, I- の詳論を参照。

(43) 『亜麻布の書』については、M.Pallottino, 'Il contenuto del testo della Mummia di Zagabria' (1937), in : *Saggi*, 547ff.; Steinbauer, 315ff.等。「カプアの瓦板」については、M. Pallottino, 'Sulla lettura e sul contenuto della grande iscrizione di Capua' (1948-49), in : *Saggi*, 589ff.; M. Cristofani, *Tabula Capuana*, Firenze 1995.

た時には国家の命運が懸っていた以上、臆トは単なる儀式ではありえなかった。従って神意を告げる者として最終決定権を委ねられた臆ト師の責任は重大だった。彼らに求められたのは、単に宗教的な知識や技術だけではなく、様々な分野に関する幅広い知識、的確な現状分析力、最善の対策を講ずる能力であり（後述）、生半可な知識や未熟な技術で臆ト師を務めるわけにはいかなかったのである。

ところで、エトルスキ共和政都市国家の主要な政務官職は、たいてい1年任期であった。上述のように、臆ト師は長年の研鑽によって臆ト術の奥義を習得したのであり、このような貴重な人材を1年任期の政務官にすれば、彼の専門的知識と技術は1年限りとなり、有効に利用されないのみか、毎年新たに、従ってそれだけ多くの臆ト師が必要となる。しかしたとえ大都市国家であっても、それほど多数の熟練した臆ト師を輩出することは困難だったのであろう。公的なト占に携わる臆ト師の人数（戸数）は、1都市国家当たりせいぜい数人（数家族）であったと推定される。逆に臆ト師を長期（例えば10年間）の政務官とした場合には、彼らのト占の重要性に鑑み、彼らの政治的地位は不動のものとなって他の政務官をはるかに凌駕し、しかも彼らは神々の意向を伝達する者として神権政治を敢行する恐れも生じたであろう。事実タルクイニーのプレナスは、官職には就かなかつたにも拘らず、その「都市国家で君臨した」のである。以上縷述したように、長年の研鑽を積んで経験豊かな臆ト師を1年任期の政務官職に就任させるのは、いろいろな点で得策ではなかつた。それ故にこそ、彼らは正規の官職組織に編成されなかつたのである。

そしてまた、臆ト師が政務官と一線を画した第2の理由として、特に前4～3世紀にエトルスキ諸都市国家がローマと間で厳しい戦争を繰り広げたこと、が挙げられるかも知れない。というのは、もし臆ト師が軍事と政治の指導機関である正規の官職から分離されていれば、戦勝の場合賞賛されたのは彼らではなく、実際に戦った将軍と兵士であり、従って臆ト師の政治的立場を強化することはなかつた。また敗戦の場合には、それが将軍の明らかな作戦ミスや兵士の怯懦のせいではなければ、仮に臆ト師のト占に何らかの瑕疵があつて敗北を喫したとしても、神々がそのような意向を持っていたということになり、将軍や兵士の責任は不問に付され、軍事力の減退を最小限に留めることができたであろう。対ローマ戦に期間中、エトルスキ諸都市国家の臆ト師は自国の政治・軍事についてト占によりそれぞれの神意を告示した。その結果（もちろん他の要因もあつたが）、エトルシア全体の意思統一が難航し、とりあえず国ごとに個別的に戦わざるをえなかつたが、最後の段階で各国の臆ト師の状況判断は一致し、エトルスキ民族は大同団結し、他民族とさえ同盟を結んでローマと対決したのである。その結果は敗戦であつたが、エトルスキはこれを神意、逃れられない宿命として受入れたであろう。

上記の2つの理由で臆ト師は正規の政務官とはされなかつたと考えられる。とはいえ彼らは都市国家にとって不可欠の存在であり、いわばその附置機関として機能したのである。

## まとめ

エトルスキの臍卜師は、ローマの軍門に下る以前には、たとえ各都市国家の名門貴族ではなかったとも、少なくとも有力者であった。彼らは1年任期の正規の政務官には就任しなかったが、そのト占術により政治に介入することもあった。彼らのト占術は複雑であり、その修得には長期の学習と修行が不可欠だったので、その技術は経済力をもつ有力家族で代々受け継がれたであろう。エトルスキの諸都市国家がローマに屈した前3世紀初頭以降、臍卜師の役割は原則として都市国家の内政に関するト占と天変地異などの予兆の解釈に限定された。前2世紀半ばにローマで「60人臍卜師団」が結成されると、臍卜師の養成がエトルリアのみならず近隣にあるローマの植民市でも図られるようになった。エトルスキ諸都市国家がローマ国家に併合された同盟市戦争以後、エトルスキの臍卜師はローマ市民としてローマの臍卜師となり、本来の家柄や都市国家との関係は希薄になり、やがて彼らも公式にはラテン語版『エトルスキ教典』を使用するようになった。

## 共和政ローマにおける臍卜師

上で考察したように、エトルスキの臍卜師の機能・性格・出自は時代によって変貌した。このようなエトルスキの臍卜師を、ローマ共和政国家はどの段階で、何故受け入れ、どのように処遇したのか、そのさい彼らの機能・性格・出自に如何なる変化が認められるのか。ローマ共和政国家が「ローマ帝国」Imperium Romanumとしての実質を確立したのは、帝政の成立より百数十年前の前2世紀半ばであるが、その200年以上も前から共和政ローマとエトルスキ臍卜師との関わりが報じられているので、そこまで遡って両者の関係を検討しつつ、上記の問題の解明を試みようと思う。(エトルスキ系王政期にも臍卜師は登場するが、本稿では取り扱わない。)

すでに共和政初期からローマがエトルスキの臍卜師と接触していたことは、リウィウスが伝える次のエピソードが明示している<sup>(44)</sup>。前5世紀末、対ウェー戦の最中にアルバーヌス湖が氾濫するという異常事態が発生したので、ローマはデルフォイに使節を派遣した。同じころローマは、ウェーの臍卜師がその氾濫について予言していると聞いたので、彼をかどわかし、その湖から水が引かない限りウェーを占領できないという予言を聞き出した。デルフォイから帰った使者も同じ内容の神託を持ち帰った。そこでローマはアルバーヌス湖の排水を行った。そしてそのあとローマはウェーの本丸に通じる地下道を掘り、そこにローマ兵たちが待機した。すると犠牲を捧げているウェー王の脇で臍卜師が、犠牲獣の内臓を切り刻む者に勝利がもたらされると言っている言葉が、上の方からもれ聞こ

---

(44) Liv., 15, 1ff.; 21,4ff. (平田『国制』、62ff.参照)。以下では原則として典拠のみを挙げ、史料原文は紙幅の関係で引用しない。なお初期キリスト教関係の史料についても同様であるが、主要な史料はP. Guyot / R. Klein (Hrsg.), *Das frühe Christentum bis zum Ende der Verfolgungen. Eine Dokumentation*, Darmstadt 1997 (2006<sup>3</sup>) (= Guyot / Klein) に独訳・注とともに収録されている。

えてきた。ローマ兵たちは地下道から突入してその内臓を奪い取り、司令官の許に持っていった。こうしてウェーは陥落した、というのである。

これら2つのエピソードのうち後者については信憑性が疑われる（リウィウス自身疑っている）が、前者では臍卜師の予言がデフォイの神託と関連付けられていて、その史実性は確認できないにせよ、可能性は排斥できないであろう。このエピソードは少なくとも、ローマが異常事態にさいしエトルスキの臍卜術に無関心ではいられなかったことを示唆する。しかもローマ国民は前358年、エトルスキの臍卜師の持つ恐るべき力を実感した。この年、タルクイニーとの戦いで捕虜となったローマ兵306人が、恐らく臍卜師の託宣により全員虐殺されたのである<sup>(45)</sup>。この震撼すべき事態に直面して、ローマ国家は逆にエトルスキ臍卜術の持つ絶大な威力をまざまざと感得したに違いない。何故なら、神々の意向という旗印の下にこのような蕃行を敢行させる力を、ローマのト占官は保持していなかったから。

そもそもローマのト占（*auspicia* ないし *auguria*）<sup>(46)</sup>は、政務官が民会の開催、軍隊の出動等の国務を執行するさいに、神々の承認を得るために主に鳥を観察して公務として行うものであり、例えば民会を開く場合、開催当日の早朝に、その日に開催してもよいかどうかを占うが、そのさいイエスカノーかだけを尋ねるのであって、民会は何月何日に開催したら良いのかというような質問は許されなかった。つまり予め人間が決定した事柄について神々の同意を得るのがローマ式の占いであり、ト占官（*augur*）がコンスル等の命令によってそのような占いを公式に実行した。アウスピキアを行う権限を握っていたのはト占官ではなく、インペリウムを保持する高級政務官であり、また儀式や祭礼は *pontifex maximus* 「最高神官」を筆頭とする神官団が担当した（ただしト占官と同様に神官団にも政治的権限はなかった）。しかもローマのト占はエトルスキの臍卜と異なり、雷による占いは未発達であり、また天変地異等の予兆に対して適切な手当を行うには、十人委員（*decemviri*）がシピラの神託をひもとくしか方策がなく、さらに未来を予言する権限はなかった。従ってローマのト占官は、国務遂行にさいして神意を確認することはできても、天変地異や非常事態あるいは落雷等に対して適切な処置を指示する機能も能力も不十分だった<sup>(47)</sup>。ローマがこのような固有の欠陥を有する本来のト占術の克服を目指して、かかる機能と能力を備えたエトルスキの臍卜術を導入し、そのト占により遺漏なく国政を遂行しようと考えたとしても不思議ではない。

ローマがエトルスキの臍卜術を重視したもう一つの理由は、臍卜師がローマ軍に同行し、適切なアドバイスをを行うことを期待したからだ推考される。リウィウスによれば、第2回ポエニ戦争の時エトルスキの臍卜師がローマの軍隊に同行してト占を行い、例えば敵の

---

(45) Liv.,7,15,10. これが臍卜師の託宣によったと言う明示はないが、神々の承認は不可欠だった。

(46) ローマのト占については、Bouché, 175ff.; P. Catalano, *Contributi allo studio del dritto augurale*, Torino 1960; Bloch, *Prodiges*, 80ff.; 比佐篤「共和政ローマにおける予兆祭儀の儀礼化と対外政策」『史泉』98(2003),19ff.

(47) MacBain, 21,57ff., 66f., 125ff. によれば、臍卜師はローマの宗教担当の十人委員と両性所有者の処置について協力した。

待ち伏せがあるという警告を出し、ローマ軍はその託宣を信じて待ち伏せを回避したという。(Liv., 27, 16, 15) このエピソードから読み取れるのは、臆ト師が的確に戦況を把握し、然るべき作戦を策定したということであり、その前提として彼は特に軍事に関する該博な知識を有していたに違いない。彼に求められたのは、単に宗教的な知識やト占の技術だけではなく、様々な分野に関する幅広い知識を駆使して的確に現況を分析し、将来を見据えつつ最善の対策を案出する能力であったはずである。ローマのト占官に欠けていたのは、まさにこのような機能・能力であった。

以上のような理由で、ローマはエトルリアから臆ト師を招聘し、ト占を行わせる政策を採るようになったと考えられる。前 295 年イタリア諸民族との決戦 センティーヌムの戦いで勝利して、ローマは敵対関係を解消したエトルリアの諸都市国家に有力貴族の子弟を 6 人ずつ留学させ、<sup>(48)</sup>『エトルスキ教典』を修得させ、エトルスキのト占術をマスターさせた。またその重要性に鑑み『エトルスキ教典』をラテン語に翻訳させていた(そのエトルスキ語の原典は現存せず、ラテン語訳だけがケケロ、プリニウス、マクロビウス、コルネリウス・ラベオ等の著作の中で断片的に伝えられている)。そして恐らく前 2 世紀中頃に、60 人のエトルスキ臆ト師で構成されるト占の専門集団「60 人臆ト師団」ordo haruspicum LX を組織した。その創設の時期に関しては、帝政期と見なす説もあるが、<sup>(49)</sup>前 1 世紀前半に編年される関連史料がある以上、私見では一以下で説明するように一前 2 世紀中葉に編年される。<sup>(50)</sup>

エトルスキ臆ト師の実力はハンニバル戦争で実証済みだった。戦後ローマは海外に進出し侵略を開始するが、そのさい軍隊司令官はかかるエトルスキ臆ト師の実績を評価して彼らを招聘して起用したであろう。当初彼らはローマ国家の公的機関としては組織されなかったが、遅くとも前 122 年より前に「60 人臆ト師団」に編成されたであろう。何故なら、ガイウス・グラックスがカルタゴの跡地で植民市建設を実施したその翌年、元老院の反対派は臆ト師のト占を利用してその計画を挫折させたから。<sup>(51)</sup>ト占が護民官の公式の立法を無効にし、彼を死に追い込むほどの威力を発揮したとすれば、これを担当した臆ト師は単なる私的な臆ト師ではありえず、国家によってその公的資格を保障された臆ト師だったはずである。しかもローマはすでに地中海各地に多くの属州を保有し、さらなる軍事侵略を推し進めていたので、イタリア内部担当の臆ト師だけではなく、<sup>(52)</sup>属州総督や軍隊司令官専属の臆ト師も当然かなりの数が必要とされていたに違いない。

さて「60 人臆ト師団」の構成員が 60 人だったとすれば、エトルリアだけでこの人数を充足することは、各都市国家(当時まだ名目上であれ独立を保っていたのは 10 ほどである)の

---

(48) Cicero, *div.*, 1, 92 ; Val. Max., 1,1 (派遣された子供は 10 人ずつとする)。MacBain, 49 によれば、エトルスキ臆ト師は前 278 年にローマと公式の連続的關係に入った。

(49) 例えば Turcan, 57.

(50) Fast., fr. 1. Torelli, *Elogia*, 121.

(51) Plut., *C. Gracchus*, 11.

(52) 事例については典拠とともに、Briquel, *Chrétien*, 24ff.



社会的状況から見て困難だったと思われる。ローマは前3世紀以降エトルリアの北方に、例えばブラケンティア（ピアチェンツァ）等の多くの植民市を建設したが、ここでエトルスキ系の臆卜師が養成されたことは、「ピアチェンツァの肝臓」によって立証される。ローマはここからも臆卜師を徴用したに違いない<sup>(53)</sup>。以上の諸点から推察して、「60人臆卜師団」の創設の時期は、ローマの海外進出・侵略とガリア・キサルピ・ナ地方での植民市建設が進行し、しかもグラックスのカルタゴ植民市建設計画以前の時期、即ち前2世紀半ばということになるのである。

これらのエトルスキ臆卜師の職務内容は、ローマ国内および戦地において重要な政策・作戦を策定・実施するさいに卜占による託宣を提示すること、また異常事態や天変地異を解釈し然るべき手当を告知することだった。ただし彼らの卜占の結果を受け入れるかどうか、またその解釈や手当を採択するかどうかは、ローマ側の自由裁量に依った。しかも臆卜師団はローマ政務官団とは峻別され、そしてローマ本来の神官団の枠外に置かれ、国家機構とは分断された補助機関に留め置かれた<sup>(54)</sup>。従ってそれは、ローマ本来の卜占官より重宝され重要な国務に関与したけれども、大きな影響力を持つ政治的勢力とはなりえなかったのである。ローマ国家にとって必要だったのは、エトルスキ臆卜師の宗教や神々への信仰ではなく、彼らの卜占の技術と該博な実用的知識であり、その卜占によって神々の承認を得たとして支配階級が自らの政治・軍事を支障なく推進することだった<sup>(55)</sup>。エトルスキの神々の体系および観念はローマのそれとは大きく異なっており、とうていローマ人に受け入れられるものではなかった。

これらの臆卜師の出身地はエトルリアに限定されず、実証される限りではポ一下流域とガリア・キサルピ・ナであるが、今やそれ以外のイタリア諸地方に及んでいたであろう。同盟市戦争後イタリアの全自由民がローマ市民となったので、「60人臆卜師団」の構成員も全員ローマ市民として、イタリア各地——例えば南イタリアのベネヴェントゥム（CIL IX, 1540）——から徴募された。エトルリア外の臆卜師は、たとえその祖先がエトルリア出身であっても、かつてのエトルスキ都市国家には職務上直接関与せず、また出身都市の利害を表明する立場にはなかった。エトルスキ以外のイタリア出身の臆卜師はローマ国家の公式の臆卜師として、エトルリアに由来する卜占を行ったけれども、彼らの本来の宗教はエトルスキ宗教とは無縁であり、彼らに求められたのはエトルスキの神々への信仰では

---

(53) Torelli, *Elogia*, 121 は (MacBain, 50 也)、臆卜師の人数とエトルスキの “ XII populi ” との関連を主張するが、エトルリア外の状況を考慮に入れていない。

(54) 「ローマにおける臆卜師はコンサルタント的な役割しか演じなかった」 (Bloch, *Prodiges*, 50)。これに反し、ローマの神官職はコンスル級の有力家族構成員であり、自身も官職経験者だった (G. J. Szemler, *Priests of the Roman Republic*, Bruxelles 1972, *passim*)。pontifex maximus はクリア民会を招集するなど、ある意味でコンスルと対等と見なされる (R. Muth, *Einführung in die griechische und römische Religion*, Darmstadt 1988, 293)。

(55) M. Torelli, ‘ Senatori etruschi della tarda repubblica e dell’ impero ’, in : *Dialoghi di Archeologia*, III-3-1969, 335 「共和政末期のエトルスキの臆卜師は、ローマ世論の形成、特に元老院の決定において、重要な部分を構成した」。

なく、すでにローマ化されたそれらの神々が発する徴を正確に読み解く技能だった。従って、エトルリア以外の諸地方で臆ト師が増加したにも拘らず、これらの地方にエトルスキ宗教が普及して各家でエトルスキの神々が崇拝されることはなかったのである。

ローマ軍に配属された臆ト師は、海外遠征にさいして軍隊に同行し、将軍や兵士のみならず自らの生命に係わるト占を託された。最終決定は将軍が行ったにせよ、作戦策定の諸段階で臆ト師は託宣という形で助言を求められたであろう。その点でこの種の臆ト師の責任は重大だった。

ローマ国家直轄の「60人臆ト師団」と並んで、エトルリア各都市には依然として臆ト師がおり、イタリア各地の自治都市も帝政期に実証されるようにそれぞれ独自の臆ト師を抱えていたと推定される。またこれらの公式の臆ト師団の他に、個人の専属臆ト師や営利目的で占いを行う私的臆ト師もいた。とはいえ、共和政末期に有力者や権力者に対して予言や警告を行うエトルスキの臆ト師 例えばスツラに対して前89年と前83年の勝利を予言したポストゥミウスや、カエサルに前44年3月15日まで危険に気を付けるよう忠告したスプリナ<sup>(56)</sup> は、将軍専属の私的臆ト師ではなく、「60人臆ト団」の中の最高臆ト師、さらに言えば、帝政期における「皇帝の臆ト師」に相当するような臆ト師であった、と見なすべきであろう。

「60人臆ト師団」のメンバーは、前述の通り、エトルリアおよびイタリア各地で養成された臆ト師だったが、エトルスキ自身を除く臆ト師が教典として用いたのは、当初からラテン語版『エトルスキ教典』だった。同盟市戦争後エトルリア出身の臆ト師もローマ市民となり、やがて公式には彼らもラテン語版の教典を使わざるをえなくなった。いずれにせよ、ラテン語版『エトルスキ教典』の使用は、「ピアチェンツァの肝臓」に記載されたエトルスキの神々の呼称も全てラテン語化されたことを意味する。

エトルスキ固有の雷神であったティン/ティニアはすでにローマの Jupiter と、愛の女神 turan は Venus と同視され、逆にイタリア古来の神々あるいはローマの神々、例えば Juno は エトルスキの uni と、nethuns は Neptunus と同定されており、かかる同一視は<sup>(57)</sup> 少なくともト占に関わる限り 末端の神々にまで及んだに相違ない。従ってエトルスキの神々もまたローマの神々となったのであり（ただし前3世紀以降のエトルスキ衰退期に登場した、恐ろしい形相の死神 tu ul a や van は、ローマに導入されなかった）、前者の属性も後者の属性に転換されたと考えられる。エトルスキ語が死滅した後1世紀半ば以降、エトルリアの住民にとっても至高神はもはやティン/ティニアではなくユピテルであり、ティニア以外に雷を支配する神々や「隠れた神々」の存在は、一般民衆には忘れ去られてしまったであろう。こうして1世紀末までに、本来のエトルスキ宗教はローマ宗教の中に完全に吸収

(56) 事例については典拠とともに、Bloch, *Prodiges*, 134ff.

(57) エトルスキの神々とローマの神々との相互関係については、H. Rix, 'Rapporti onomastici tra il pantheon etrusco e quello romano,' in: *Gli Etruschi e Roma*, 1981.

されてしまい、『エトルスキ教典』をひもとく臆ト師のみが、エトルスキ本来の神々の体系や性格を記憶に留めていたのである。

## まとめ

共和政ローマはウェーやタルクイニー等のエトルスキ諸都市国家と対戦する中で、エトルスキ臆ト師のト占技術や実践的知識に接した。ローマ自体のト占官に欠けていたので、それらは、その重要性に鑑み、ローマはエトルリアに子弟を派遣して『エトルスキ教典』を習得させ、これをラテン語に翻訳させた。ポエニ戦争のさい、ローマはエトルスキ臆ト師を招聘して軍隊に同行させ、託宣という形で彼らの提言を利用した。前2世紀中頃、エトルリアのみならずイタリア各地で養成された臆ト師が公式に「60人臆ト師団」に編成され、その中から属州総督や軍隊司令官付きの臆ト師が派遣された。彼らの職務は天変地異等の予兆を解釈しその手当を提示し、政策や作戦の策定に関しト占により提言を行うことだった。とはいえ「60人臆ト師団」は正規の政務官団や神官団とは別置の付属機関であり、彼らの託宣を採用するかどうかはローマ側の自由裁量によった。同盟市戦争後「60人臆ト師団」の構成員はローマ市民としてローマ国家の臆ト師となり、ラテン語版『エトルスキ教典』を使用し、本来の出身都市との関係は希薄になった。

## 帝政前期における臆ト師

前27年、元首政を樹立して事実上の軍事独裁者 = 皇帝になったアウグストゥスは、伝統的なローマ・イタリアの宗教を復興し、エトルスキ・ローマの臆ト師も新たな出発を迎えた。以後約200年間「ローマの平和」が続くが、この時期（ただし共和政末期のものも若干含まれている）の臆ト師に関する資料は、文献史料の他に100点ほどのラテン語碑文である。碑文史料を通覧して判明するのは、帝政期には帝国所属の臆ト師として「皇帝の臆ト師」(haruspices Augusti, Augustorum)と「60人臆ト師団」(ordo haruspicum LX)がいて、それから自治都市所属の臆ト師として「都市臆ト師、植民市の臆ト師」(haruspices publici, coloniae)がいて、この中に「二人官の臆ト師」(haruspices duumvirum)や「アエディリスの臆ト師」(haruspices aedilium)が含まれており、この他に、「軍団の臆ト師」(haruspices legionum)、また軍団の部隊長を務めた「最高臆ト師 haruspex primarius, maximus」も実証されていたことである。

まずこれら各種の臆ト師の実態について考察する。

「皇帝の臆ト師」については、数編の短い碑文しか実証されてないので、その役職について詳細は不明である。アウグストゥス以前にはまだ Augustus という尊称も、従ってま

---

(58) K. Latte, *Römische Religionsgeschichte*, München 1967, 249ff.

(59) 碑文史料の収集は Thulin と Briquel が行っている(前掲注 21)。

(60) Thulin, III, 149, 151f. は haruspices publici を haruspices coloniae と同列におき、「都市臆ト師」と見なす。Bouché, p.113, n.6 は前者を「60人臆ト師団」の中を含める。

た「皇帝」もまだ存在しなかったので、当然「皇帝の臆ト師」は存在しなかった。アウグストゥスがこの制度を新設したのかどうかは定かでないが、少なくともこの新しい制度の設置には乗り気ではなかったと思われる。というのも彼には、臆ト師プリンナが養父カエサルに迫る死を予言し、その警告を無視した独裁官が結局暗殺されたという苦い思い出があったからである。とはいえ共和政以来の伝統を一名目的にではあれ一順守しようとするれば、宮廷業務を遺漏なく遂行するためにもト占は必要であった。アウグストゥスは恐らくエトルスキ系の側近マエケナスの勧めに従って、由緒あるエトルスキの臆ト師を事実上「アウグストゥス（皇帝）の臆ト師」として採用した。「皇帝の臆ト師」の任免権は当然アウグストゥスに帰属し、その業務内容も皇帝が規定したに違いない。

3世紀に編年される碑文（CIL 2161）で言及されている L. Fonteius Flavianu(s) は、「20万セステルティウスの皇帝の臆ト師 haruspex Augg. C(C)」「神官 pontifex」「アルバの独裁官 dictator / Alban.」「都市臆ト師の長官 mag. pu(blicus) / haruspicum」を歴任し、「60人臆ト師団に贈り物をした o(rdini) / haruspicum LX d.d.」。この上位から下位への官職歴任階梯（cursus honorum）の記載によって、地方都市アルバの dictator や pontifex よりも「皇帝の臆ト師」の地位が高かったことが判明する<sup>(62)</sup>。実際彼は20万セステルティウスという、他の官吏とは桁はずれの、最高政務官並の年俸を貰っていたのだ（後記22頁以下）。

上掲碑文中の mag. pu(blicus) / haruspicum は、pu を pu(blicus) よりもむしろ pu(blicorum) と補読して後続の単語 haruspicum にかかる形容詞と捉えれば、「都市臆ト師の長官」と把握できる。かかるものとしてフォンテイウスは「60人臆ト師団に贈り物をした」のであり、従って「60人臆ト師団」は「都市臆ト師」とは別の、より高位の帝国の臆ト師集団だった<sup>(64)</sup>。「60人臆ト師団」については、アウグストゥスは現状維持のままで余計な手を加えず、その定員充足や再編成は行わなかったと推考される。というのも、内乱が終息し平和が訪れると、現地の属州総督が実際に軍事的行動を要求される事態は殆どなくなり、それに伴い軍事面で臆ト師がト占を行う必要もなくなったので、現状のままでも十分だと思われたであろうから。

しかしながら、帝政期成立当初から臆ト師の再編成を不可避とする要因があった。それは共和政期に比べて帝政期には国家行政機構に組み込まれた属州が増加し、そこに派遣される臆ト師の数も増えたことである。共和政以来の伝統に則る限り、属州総督や軍団司令官それぞれに臆ト師が随行したが、この慣行を滞りなく実施するためには、多分欠員が生じていた「60人臆ト師団」を編成し直して欠員を埋め、属州統治に支障をきたさないよ

---

(61) Bouché, 112ff,326 ; Briquel, *Chrétiens*, 72 ; Montero, *Política*, 30.

(62) アルバの諸官職については、Haack,162ff.

(63) Cf. Pekáry, *Die Wirtschaft der griechisch-römischen Antiken*, Wiesbaden 1969, 109.

(64) Torelli, *Elogia*, 122によれば、実証された25人の臆ト師のうち確実に9人は騎士身分だった。

うにする必要があった。もっとも、アウグストゥスの後継者ティベリウスにも、その次に帝位を継いだカリグラにもそのような再編を示唆する史料はない。

これに対して、第4代皇帝クラウディウスについて、タキトゥス (*Annales*, 11,15,1-3) は次のように伝えている。即ち帝は47年に「外來の迷信 *externae superstitiones*」の跋扈を排斥し、「エトルリアの有力者 *primores Etruriae*」が護持してきた「イタリア最古の教典 *uetutissima Italiae disciplina*」を護り儀式を励行するため、「臆ト師組合 *collegio haruspicum*」の再編を元老院に指示したと。クラウディウスはエトルスキを研究した皇帝として著名であり、多分この民族への関心もあって「60人臆ト師団」を再編制した。そのさい『エトルスキ教典』は、エトルスキに由来する「イタリア最古の教典」として「祖先の慣行」の中に組み込まれたのである。

ブリケルによれば、クラウディウス帝による「60人臆ト師団」の再組織化は、彼のエトルスキへの関心よりも、外來の神々や儀式の蔓延が原因である。確かに『エトルスキ教典』は、公式にはそのラテン語版だけが使用されており、皇帝自らその教典を「イタリア最古の教典」と規定した。しかし帝がエトルスキ臆ト術とその聖典である『エトルスキ教典』に深い関心を持っていなければ、「外來の迷信」<sup>(66)</sup>に対抗するためにその教典を「イタリア最古の教典」と規定しつつも、元來エトルスキの臆ト術に依拠する「60人臆ト師団」を再編するという発想は出てこなかったのではあるまいか。

ともあれ再編された「60人臆ト師団」は、実証される碑文から判明する限り、ローマ市およびその近隣の都市、即ちラティウムのおスティアやアルバ、エトルリアのタルクイニー等だけではなく、ガリアの首都ルグドヌムにも配属されている。「60人臆ト師団」のメンバー中には都市役職への就任歴を有する臆ト師がいるので、以前に都市の役職についた後「60人臆ト師団」のメンバーに選出されて帝国所属の臆ト師となり、改めて「都市臆ト師の長官」として帝国各地の主要都市に配属されたと考えられる。彼らの地位は当然「都市臆ト師」のそれよりも高かった。エトルスキ系と判別される臆ト師は後1世紀の間は多かったが、2世紀以降殆どいなくなった。<sup>(67)</sup>

「60人臆ト師団」に属する臆ト師は、共和政期のそれが本来の官職機構の枠外に留め置かれたのと違って、帝国の官職組織の中に編成されその不可欠の部分成した。ただし彼らの政治的地位は、実証される限りでは、「皇帝の臆ト師」ですら地方都市の最高官止まりであったことを顧慮すれば、コンスル等の帝国高級政務官職よりはるかに低かったと推論される。「60人臆ト師団」の任免権、配属権はクラウディウス帝が元老院に諮問してそれが再編されたことから判断して元老院に帰属したと考定されるが、配属先が皇帝管

---

(65) Briquel, *Chrétien*, 50,101ff.

(66) “*externae superstitiones*”については、G. Jossa, *I cristiani e l'impero romano. Da Tiberio a Marco Aurelio*, Roma 2000, 103ff.参照。

(67) Torelli, *Elogia*,125.

轄属州の場合には、皇帝が選任したと考えるのが自然であろう。

「軍団の臆卜師」は別個の臆卜師団を構成していたのではなく、「60人臆卜師団」の中から選出されて、ローマあるいはたまたま配属されていた都市から特定の軍団に司令官付きの臆卜師として派遣されたのであろう。場合によっては、辺境の属州に駐屯する軍団の将軍が臆卜師を現地で確保することもあった。一般兵士が臆卜師を務めた事例もある(CIL 2564,20等)。「軍団の臆卜師」はヌミディアやガリア等でも実証されており、臆卜師を重用したセプティミウス・セウェールスによる創設<sup>(68)</sup>ではなく、再組織化を想定すべきであろう。

「都市、植民市の臆卜師」と「2人委員、アエディリスの臆卜師」の出土地は、イタリア(ベネヴェント)、ガリア(ニーム、トリアー等)、スペイン(ウルソ)、ダキア(アブルム)というふうに帝国各地にまたがっている(ただしギリシア諸国では実証されていない)。当該都市ないし植民市における彼らの官吏としての地位が低かったことは、ウルソ(スペイン)出土の碑文<sup>(70)</sup>によって実証される。碑文はこの植民市に二人官と複数のアエディリスが設置されるべきことを述べ、彼らの部下となるべき官吏の称号と人数(臆卜師はそれぞれにつき一人)を挙げた後、各官吏の俸給を明記している：

32. *eisque merces in eos singul., qui viris apparebunt, tanta esto. In scribas sing. HS MCC. In accensos sing. HS DCC. In lictores sing. HS DC. In viatores sing. HS CCCC. In librarios sing. HS CCC. In haruspices sing. HS D. Praecones HS CCC. Qui aedilib. appareb. in scribas sing. HS DCCC, in haruspices sing. HS C (Dの誤記), in tibicines singul. HS CCC, in praecones sing. HS CCC iis s.f.s.(= sine fraude sua) kapere liceto.*

この俸給表で見る限り、臆卜師は二人官に仕える場合も(*qui viris apparebunt*)、アエディリスに仕える場合も(*Qui aedilib. appareb.*) その俸給は一人当たり500セステルティウスで、上級官吏(*scribae*「書記」1200/800)よりもかなり少なく、中級官吏(*accensi*「廷吏」700、*lictors*「警吏」600)以下であり、下級官吏(*viatores*「呼び出し係」400/300、*librarii*「筆写吏」300、*praecones*「伝令吏」300)よりは上である。この俸給から評定する限り、「都市臆卜師」は中級官吏と下級官吏の中間に位置しており、むしろ下級官吏の最上位と見なされよう。ともあれ植民市の臆卜師は、俸給を受ける「地方公務員」だった。しかもその職は、その専門性から判断して他の宗教的職掌と同様に、恐らく1年任期ではなく終身つまり定年までだったと推察される。

---

(68) Haack, 137ff.

(69) Briquel, *Chrétiens*, 39.

(70) CIL, 5,2864,LXII,32ff. = K.G. Bruns (ed.), *Fontes Iuris Romani Antiqui*, n.28. このローマ市民植民市の建設は前44年であるが、法令は後1世紀末に再発布された(J. Rüpke, 'Urban Religion and Imperial Expansion: Priesthoods in the Lex Ursonensis', in: L. de Blois et al.(ed.), *The Impact of Imperial Rome on Religions, Ritual and Religious Life in the Roman Empire*, Leiden・Boston, 2006 (= *Impact*), 15). Haack, 76はドミティアヌス時代に編年する。

このような「終身雇用の地方公務員」は、ローマ帝国が植民市を建設するたびに増え続け、従って彼らの数も増加したはずである。植民市の他にローマ的制度を採用した地方自治都市にも、都市の官吏として臆ト師がいたに相違ない。いずれにせよ植民市および自治都市の臆ト師は、下級官吏とはいえ専門職として他の下級官職よりも身分的に安定した職業だったと考定される。従ってそれは、帝国の上級官職への就任を目指す元老院身分や騎士官職を歴任して栄達の道を歩もうとする騎士身分ではなく、経済的にある程度余裕のある平民上層部にとってこそ魅力ある職業だったに違いない<sup>(71)</sup>。地方自治都市の臆ト師になるには、何年間か学習してラテン語版『エトルスキ教典』を習得しさえすれば、その神髄を究めなくとも、家柄や出身地に関係なく市民であれば誰にでも門戸はかなり広く開かれていたと考えられる。というのは「ローマの平和」が続く限り、共和政期とは異なり、臆ト師は将軍や兵士の死命を制するような、あるいは都市の命運を左右するような重大なト占を行う機会は稀であり、従って軍事的知識や経験は殆ど必要とされなかったから。そして無難に勤めていれば、都市の官職を歴任して最高級の「皇帝の臆ト師」に登りつめる可能性もあった。停年退官後、彼らは私的臆ト師として民間で占いを生業とすることもあったであろう。

要するに、2世紀末に至るまでの最盛期ローマ帝国において各種の臆ト師は、完全に帝国および都市機関の一部に組み込まれ、太平の世にあって軍事への関与は無きに等しく、また帝国や都市の行政に直接影響を与えることも殆どなかったであろう。この時期における公的臆ト術は、公務を円滑に進めるための儀礼であり、異常事態や天変地異が起こった場合には、臆ト師はその予兆の意味を解釈し適切な手当を進言しさえすればよかった。しかもこの場合その採否は上級機関に委ねられ、さらに他の手段 シビラの書やデルフォイの神託等 による確認が併用されることもあった。「皇帝の臆ト師」でさえ、皇帝に対してかなり気楽に予言や警告を行うことができたのである。例えば69年1月15日早朝ウンブリキウス (Umbricius) は犠牲獣の内臓を手にするや否や、ガルバ帝に危険が迫っていると託宣した (ガルバは間もなく襲われて殺害された<sup>(72)</sup>)。

## まとめ

帝政期のローマ帝国には様々な臆ト師があり、公的臆ト師には序列があった。頂点に立ったのは、多分アウグストゥスにより創設された皇帝直属の「皇帝の臆ト師」であり、彼らは高級政務官並の待遇を受け、その任免権は皇帝が握った。その次に位する帝国所属の臆ト師は、クラウディウス帝が再編した「60人臆ト師団」のメンバーであり、この中から帝国の主要都市の「都市臆ト師の長官」、属州総督付きの臆ト師、将軍付きの臆ト師（「軍

---

(71) M. Beard, J. North, S. Price, *Religions of Rome*, I, Cambridge 1998 (= Beard, *Religions*), 261 は、臆ト師は解放奴隷や最下層の住民だったとするが、騎士身分の者がいたことは事実であり (前掲注 64)、また解放奴隷や最下層の住民が臆ト術に関する十分な知識を習得できたかどうか疑問である。

(72) Plut., *Galba*, 24ff.; Suet., *Galba*, 19.

団の臆ト師)が選任された。彼らの任免権・配属権は元老院、場合によっては皇帝が掌握した。ローマの地方自治都市やラテン植民市には、「都市臆ト師」があり、当該都市で「二人官の臆ト師」や「アエディリスの臆ト師」を務めた。彼らの地位は都市の諸官吏のうち下級の上であり、安定した職業として平民上層部に選好されたであろう。帝政初期に帝国内で平和が保たれている限り、エトルリアおよび他の地方出身の臆ト師は、帝国各地で帝国直属あるいは自治都市の官吏として公務を円滑に遂行するために不可欠のト占を担当し、また異変が発生した場合には然るべき処理を提言した。

## V 臆ト師とキリスト教

2世紀末に外民族の動きが活発化して「ローマの平和」が破綻をきたし、非合法とされたキリスト教が興隆し、さらに軍人皇帝が出没するようになると、上述の如き臆ト師の立場も変化せざるを得なくなった。 、 章で考証したように、ローマ共和政期末期から帝政初期にかけて臆ト師の出身地は、もはやエトルリアだけでなくイタリア各地に拡大されていた。帝政中期にエトルスキの臆ト師が言及される場合、それは彼らが信奉する『エトルスキ教典』が起源的にエトルスキ民族に由来することを示すだけであって、すでにその教典のテキストは実質的にラテン語のものしか存在せず、その内容もかなり大幅に変更されている。そこで以下では、独立期本来のエトルスキと区別するため、帝政期における臆ト師および『エトルスキ教典』の変化した状況を括弧つきで「エトルスキ」と表記し、最初に、各種の臆ト師がどのように変貌したのかを検証しよう。

属州辺境で戦闘状態が頻繁に発生するようになると、「軍団の臆ト師」の役割は共和政末期のそれと同様に緊迫したものにならざるを得ない。彼らはもはや終身雇用の国家公務員の地位に安閑としているわけにはいかず、再び知識と技術を総動員して、作戦の是非や戦争の帰趨についての的確な判断を下すことが求められた。各属州の軍隊司令官たちの間で皇帝の座を巡って軍事・権力闘争が始まると、將軍直属の臆ト師はまさに生死に係わるト占を要求された。彼らは自分の軍隊司令官が皇帝の座に就いた場合、「皇帝の臆ト師」に昇進し、皇帝および帝国のためにト占を行った。そして皇帝、例えばセプティミウス・セウェールスやカラカラに対してト占による警告を発した（前者はその警告を受け入れ事なきを得たが、後者はそれを無視して暗殺された、と伝えられる<sup>(73)</sup>）。

「皇帝の臆ト師」はまた他の異教や哲学との角逐を制するため、そして何よりも興隆してきたキリスト教に対抗するため、たぶん「60人臆ト師」と協同で哲学的・神学的な理論武装を行った。彼らの盛衰は、今やキリスト教を封じ込められるかどうか懸っていた。そこで彼らはユダヤ教の天地創造論等の教義を借用しながら、『エトルスキ教典』の拡充に取り組み、「イタリア最古の教典」たる『エトルスキ教典』の近代化を図り、キリスト教に対しては、伝統的な宗教をないがしろにして神々の平和を乱す *superstitio* 「迷信」と

---

(73) 事例については典拠とも、Briquel, *Chrétien*, 44ff.; Montero, *Política*, 15ff.



してこれを敵視した。ローマ帝国にとって、このように啓示された教義と成文化された教典とを持つ「エトルスキ」宗教は、非合法ながらもはや無視できない勢力に成長したキリスト教を神学的に論駁するための手段となった。こうして「エトルスキ」の臆卜師<sup>(74)</sup>は、皇帝のキリスト教対策に重要な役割を演じるに至ったのである。ディオクレティアヌスはこのような「エトルスキ」の臆卜師によるト占を利用して、キリスト教の大迫害に踏み切ったと考えられる。

モンテローロによれば、この迫害を背後で推奨したのはエトルスキ系元老院議員だった<sup>(75)</sup>。元老院の中に有力なエトルスキ系議員が何人かいて、「エトルスキ」宗教を擁護する意図からディオクレティアヌスの迫害政策を支援した可能性は、確かに排斥されないだろう。しかしながら、彼らが死守しようとしたとされる古来の宗教は、実はもはや本来のエトルスキ宗教ではなかったし、また問題のト占を担当した臆卜師は、その任務から判断して「皇帝の臆卜師」だったに違いない。彼らはディオクレティアヌスとは縁もゆかりもない元エトルスキの臆卜師ではなく、すでに彼の即位以前に軍隊に同行してト占を担当していた「60人臆卜師団」の一員であり、彼の腹心の部下として即位後に改めて「皇帝の臆卜師」に任用されたと推定できよう。この推論が的外れでなければ、その時起用された臆卜師は、ディオクレティアヌスの意を体してト占を行い、犠牲獣の臓器に何の徴も認められなかったことを、帝の意向を認可し彼ら自身の利益にも合致するように解釈したのである。たとえ元老院から働きかけがあって臆卜師が迫害を是とする託宣を出したとしても、もしも帝に迫害する意思がなかったならば、帝はその託宣を無視することができたはずであり、実際、彼はこの件につきアポロンの神託を伺いに臆卜師をミレトス（ディデュマ）に派遣している。ディオクレティアヌスの意図が何処にあったのかはさておき、彼およびそれ以降の皇帝は、自分の意思を全てに優先させうる専制君主であった。

ともあれ、ディオクレティアヌスによる大迫害の後、キリスト教は公認された。それは313年にコンスタンティヌス帝が「ミラノ勅令」を発令する以前に、すでにガリエヌス帝によって公認されており<sup>(76)</sup>、前者はその公認を踏襲しただけである<sup>(77)</sup>。しかしコンスタンティ

---

(74) Briquel, *Chrétiens, passim*.

(75) Montero, *Política*, 32ff., 52f., 55ff. ただしエトルスキ系元老院議員は120年代以降、極めて少数になった (Torelli, 'Senatori...'; 340ff.).

(76) 関連史料は Lact., *mort. pers.*, 10, 1-4 および 11, 7. 保坂高殿『ローマ帝政中期の国家と教会』（教文館 2008 年）、34, 424ff. は、ディオクレティアヌスの迫害動機の説明、即ち腸不調に対する正帝の怒りは、「教会固有の視点から施された憶測にすぎず、何ら歴史的価値のある証言ではない」と主張する。確かに臆卜師のト占が直接の迫害原因ではなかったが、臆卜師が帝のためにト占を行ったこと自体は、単なる「文飾」ではなく史実と認定される根拠がある。豊田浩志氏の書評（『史林』92-5 [2009]、137-8）；Haack, 181ff.

(77) Lact., *mort. pers.*, 34. J. Bleicken, 'Constantin der Große und die Christen'; in: *Konstantin*, 67ff.

(78) K. Bringmann, 'Die konstantinische Wende'; in: *Konstantin*, 121f.: 「コンスタンティヌスはキリスト教の神を神々の中の summa divinitas (最高神格) と見なし、異教的国家儀式において Iupiter Optimus Maximus が果たしていた役割をそれに与えた」。そして皇帝だけが最高神と直接結びつく資格を有すべきであった (P. Barceló, 'Constantins Visionen: Zwischen Apollo und Christus'; in: *Konstantin*, 144)。他方コンスタンティヌスは異教徒よりもキリスト教徒をコンスルや近衛長官に選んだ (Barnes, 320f.).

ヌス帝は迷信や魔術を排斥する政策をとり、「エトルスキ」のト占術は私的な適用を禁止された。<sup>(79)</sup>しかし落雷のさいに臆ト師がその意味を解釈することは容認された。このように臆ト師は、コンスタンティヌス時代にも公的行事において存続し、その後のキリスト教徒皇帝の時代にも、かなりの打撃は被ったけれども存立したのである。

というのも、辺境で蕃族との軍事衝突が頻発し、ローマ軍の司令官の大部分がまだキリスト教に帰依することなく伝来の臆ト術に固執した限り、キリスト教徒の皇帝といえども、その権力基盤が軍隊に存する以上、「軍団の臆ト師」の制度を廃止することはできなかったから。しかももしその任免権が元老院にあったとすれば、まだキリスト教に帰依していない元老院議員は<sup>(80)</sup>「60人臆ト師団」の廃止に反対したであろう。「皇帝の臆ト師」については、皇帝が任免権を行使した。

他方、キリスト教側にも解決すべき問題があった。即ち、複数の宗派の教義上の対立を解消し、キリスト教を一本化することが必要だった。教会は自力では一本化を達成しえず、皇帝権力に依拠してニカイアの会議でこれを<sup>(81)</sup>実現した。ここで教会はアタナシウスの教説を正統とし、<sup>(82)</sup>それ以外の教説は異端として切り捨て、異教に対抗する態勢を整えた。とはいえ、現場の軍隊司令官の大半がキリスト教に改宗するまで、キリスト教徒皇帝は臆ト術全般の撤廃に踏み切れなかった。

キリスト教徒皇帝が輩出する中で背教者と称されたユリアーヌス帝の下で、「皇帝の臆ト師」ないし「軍団の臆ト師」がト占に従事していた。もしそれが「皇帝の臆ト師」だったのなら、これは皇帝が依然として帝国所属の臆ト師の任命・配属権を保有していたことの証左であり、臆ト師の制度を復活させたわけではない。もしそれが「軍団の臆ト師」だったのなら、彼らの任命権者は元老院だったかも知れないが、彼らが皇帝自身の軍事遠征に従軍している以上、少なくとも彼らの配属は皇帝が決定したと推理される。いずれにせよ、ユリアーヌスは哲学者をも軍隊に同行させており、戦場において臆ト師はこの哲学者と対決することになった。アンミアヌス・マルケリーヌスが伝えるところによると、<sup>(83)</sup>兵士たちが殺した一頭のライオンを帝に進呈した時、この予兆が意味するのは軍隊の出動なのか撤収なのか、その解釈を巡って哲学者と臆ト師の間で意見とが分かれ、帝は前者に賛同した、という。また一人の兵士が2頭の馬とともに雷に打たれて死んだ事件についても、臆ト師は進軍を止めさせる徴と判定した。帝は彼らの託宣を採用しなかったが、それは彼が

(79) Cod. Theod., IX, 16, 1; 16, 2. 法令の分析は Haack, 155ff.; Montero, *Política*, 67 ff.

(80) J. Harries, 'Armies, Emperors and bureaucrats', in: *Christian World*, I, 44.

(81) K. Martin Girardet, 'Der Vorsitzende des Konzils Nicaea (325) - Kaiser Konstantin d. Gr.', in: *Konstantin*, 171-203; K. Piepenbrink, 'Konstantin der Große - wendet sich nicht dem Christentum zu', in: *Konstantin*, 256ff.

(82) ただしアタナシウスの教説をすべての正統派著述家が受け容れたわけではない (E.P. Meijering, 'Die Diskussion über den Willen und das Wesen Gottes, theologiegeschichtlich beleuchtet', in: *L'Église et l'empire au 4<sup>e</sup> siècle*, Vandoevre-Genève 1987 (= *L'Église*), 55ff.)。

(83) Amm. Marc., XXIII 5, 8-14. Cf. Montero, *Política*, 103ff.

(84)  
もともと新プラトン主義哲学に傾倒していて、従軍した哲学者が帝の意向にそう見解を提示したためだと考えられる。

託宣の採否はもとより皇帝の権限であり、「皇帝の臆卜師」の託宣が不採用になったため、各種の臆卜師が全面的に姿を消したわけではない。

ともあれ以後の皇帝にとって、人心の収攬を図る最も効果的な手段は宗教であった。その目的に沿う最適の宗教は、後述のような様々な点でキリスト教であり、臆卜師は迫害された。(85) 392年までに、テオドシウス帝は次々に4通の令を發布し、「エトルスキ」宗教を含む異教を禁止・弾圧し、異教徒を迫害してその神殿を破壊し、一切のト占等を厳禁して異教の書物を焼却した。

しかしそれでも異教はなお当分の間残存し、帝国所属の臆卜師「皇帝の臆卜師」や「60人臆卜師団」は解散させられたであろうが、地方自治都市の中にはまだ「都市の臆卜師」の制度を廃止しない都市もあった。(87) 次のエピソードがこのことを示唆する。ゾシモスによれば、408年フン人の隊長アラリックが大軍を率いてローマ市を攻囲し時、ローマ市の都市長官が教皇イノケンティウス1世にこう提案した。アラリックの軍勢を撤退させるため、「エトルスキ」の臆卜師の要望を受けて、彼らに落雷の儀式を行わせてはどうかと。この提案に教皇は秘密裏に儀式を行うならやらせてみようと同意したが、臆卜師はあくまでも公費による挙行に固執したため、儀式には誰一人参加しなかった。(89)

ブリケルは、臆卜師が公費による儀式にこだわったのは、『エトルスキ教典』が *res publica* への奉仕を目的とした国家宗教と結合していたためだと主張する。しかし、問題の臆卜師は、帝国所属の臆卜師が廃止されていた以上、もはや「皇帝の臆卜師」でも「60人臆卜師団」の臆卜師でもありえず、民間の私的な占い師か、せいぜい「都市臆卜師」だったに違いない。ところが、私的な占い師には勿論のこと、「都市臆卜師」にもたとえ雷に関するト占だけはまだ認められていたとしても、管轄以外のローマ市において公的に臆卜を行う資格はなかったはずである。かかる資格を有したのは「皇帝の臆卜師」か「60人臆卜師団」の臆卜師であったと考えられるが、彼らの任命権を握る皇帝はローマには逗留しておらず、都市長官にも教皇にもこの案件を処理する権限はなかった。臆卜師が私的な儀式ではなく、その資格のないことは重々承知の上で正式に公費による儀式に固執したのは、これによって落雷を成功させれば公職に復帰できるかもしれないという、はかない

---

(84) Cf. M.B. Simons, 'Julian the Apostate', in: *Christian World*, II, 1253f., 1258.; id., 'Greco-Roman Philosophical Opposition', in: *Christian World*, II, p.840-868; Montero, 'Neoplatonismo...'

(85) 臆卜師の迫害については Haack, 199ff.

(86) Cod. Theod., XVI, 10, 7; 9; 10, 11, 12 (Briquel, *Chrétien*, 169f.; Montero, *Política*, 137ff.).

(87) 禁止令が適用されたのは東方だけであり (Bouché, 349ff.), 4世紀末北アフリカでは官吏の中にも異教徒が大勢いた。P. Hadot, 'La fine...'; 295: 「異教の終焉ではなく、これとキリスト教の融合が問題である」。

(88) Zosimos, V, 41, 1-3; Sozomenos, IX, 6.

(89) Montero, 'Papa...'; Montero, *Política*, 154ff.

(90) Briquel, *Chrétien*, 186.

願望を秘めた、まさに起死回生を図る最後の賭けだったと捉えられよう。

間もなく、最後まで残存した「都市臆ト師」も姿を消し、公的な臆ト術は廃止された。ただし私的な臆ト師は命脈を保った。<sup>(91)</sup>では何故、「エトルスキ」の宗教と臆ト術は最終的にキリスト教に敗れ廃棄されたのか。その敗因を分析する前に、ブリケルがエトルスキ宗教の創唱者タゲスを「キリストのライヴァル」と規定しつつ、「エトルスキ」宗教をキリスト教と比較して両者の相違点を析出しているの、その論考を検討しよう。

ブリケルによれば、<sup>(92)</sup>「エトルスキ」宗教は次の4点でキリスト教と異なる。

(a) 『エトルスキ教典』は、聖書に比較される神聖な書物として提示されたが、その内容は道徳的な教えや神（神的なもの）への飛躍を含むどころか、むしろ占いの処方や儀礼の規定を集大成したものだったように思われる。

(b) 『エトルスキ教典』は創世記から天地創造の話などをコピーし、また来世に関する教義の中に、それとは確実に無縁だった道徳的留意事項を挿入するなどしており、この点でキリスト教は最初から勝者だった。

(c) 明らかにトスカーナ（エトルリア）の伝統は、行動基準も神との愛の交わりを個人的に行う可能性も提供しなかった。神々との関係は異常現象や犠牲獣の肝臓を観察するというような技術的手段によって行われ、そして未来が啓示された。エトルスキ宗教はこの点でキリスト教徒の非難を招いた。

(d) エトルスキの宗教はローマの公的宗教の一部を成していて、mos majorumによって固定された方式の中に組み入れられていて、res publica（「公の事柄」即ち「国家」）はその方式によって超自然的な事象との関係を調整した。臆ト師はキリスト教の躍進に歯止めをかけ、積極的に迫害を促進した。

以上のブリケルの論説について、エトルスキ宗教の敗因という観点から各項に即して問題点を指摘する。

(a) 道徳的な教えが欠如していたということは、それほど重要とは思われない。たとえば道徳的な教えが『エトルスキ教典』に明記されていなかったとしても、エトルスキの宗教では祭礼や儀式の順守が枢要であり、そしてその目的が「神々の平和」の確保、従ってまた地上における平和の維持であったとすれば、例えば「殺すな」「盗むな」等といった基本的な倫理は、不文律として当然存在したであろう。また「神（神的なもの）への飛躍 / 躍動 élan vers le divin」については、エトルスキ宗教においてもかかる現象はありうるの、<sup>(94)</sup>

---

(91) Montero, *Política*, 162 ; Beard, *Religions*, I, p. 387, n.64 (6世紀の半ばにエトルスキの臆ト師がまだ居た)。

(92) Briquel, *Chrétiens*, 20f.

(93) Pfiffig, *Religion*, 210. ただしローマの宗教は「倫理化されない宗教」であって、「内的な態度ではなく専ら儀式のための儀式の正確な遂行」(F. Dünzl, 'Römisches Geschichtsbild - christliches Geschichtsbild', in : *Monotheismus*, 36) が問題だった。

(94) Cf. Pfiffig, *Religion*, 367ff.

それが「エトルスキ」の宗教とキリスト教とを峻別する要素となりうるかどうかは疑問である。

(b) 一般民衆にとって『エトルスキ教典』の内容がどのように拡充されようと、彼らの関心の的は教義の内容がどこに由来するののではなく、それが自分たちの望みや願いを叶えてくれるものかどうかだったと思われる。問題になるのはむしろ、拡充された教典の中身が臆卜師の神学的省察にとどまり、全体の内容が 後述のような様々な理由から 民衆にほとんど伝達されなかったと考えられることである。

(c) この項目の説明内容は事実であるが、問題とすべきことは、非難ないし批判はキリスト教側から「エトルスキ」宗教側に対してだけでなく、当然その逆のケースもあつたことが度外視されている点である。例えばイエスの復活について、これが神話ではなく事実として主張された場合、「エトルスキ」の臆卜師を含む当時の異教徒も、100年以上前にパウロがアテネで経験したような拒絶反応を示したのではなからうか。

(d) エトルスキ宗教がローマの国家宗教の一部を成していたことは事実であるが、我々の問題との関連で問うべきことは、各種の臆卜師が帝国の統治・宗教機構の中でどのような政治的権限や宗教的権威を有していたか、また帝国や都市の行政機構がそれをどう利用したか、ということである。

「エトルスキ」宗教とキリスト教の相違に関してブリケルが挙げた以上4点の他に、私見ではもっと基本的で重要な相違が存在する。即ち、

(e) 古代社会における人間集団の最も基本的な単位は家であったが、帝政初期において臆卜師の家とキリスト教徒の家では宗教の取り扱い方が違っていた。臆卜師は、「エトルスキ」のト占を専業とする国家・地方公務員であったので、家庭で自分の子供にあとを継がせようとして職業上の知識や技術を伝授して、彼らが信奉する神々を信仰するように導いたかどうかは疑わしく、たとえ伝授・教導したとしても、その信仰は他の神々への信仰を許容するものであった。これに対してキリスト教徒の家では、(イエス自身は個々人の信仰を問題にしたが)パウロによって家の重要性が強調されて以来、<sup>(98)</sup> 家父長がキリスト教に帰依すれば、家族成員は家父長に従って神を信じるべきだった。キリスト教は実質上家族ぐるみの宗教であり、しかも排他的一神教だったので、キリスト教徒は異教を信奉する国家や都市が行う公的祭儀に参加せずこれを否認し、この行為が「反社会的」と見なさ

(95) 「神(神的なもの)への飛躍 *élan vers le divin*」は、エトルスキの宗教がキリスト教と異なる点として挙げられているが(Briquel, *Chrétiens*, 201)、キリスト教においては「恩寵」によって行われる(東北学院大学・佐藤司郎教授のご教示による)点が、エトルスキ宗教と異なる。

(96) M.B. Simons, 'Graeco-Roman philosophical opposition', in: *Christian World*, II, 861: キリスト教徒と異教徒との闘争は "increasingly hostile attack" だった。

(97) Montero, *Política*, 28f.

(98) 「一コリ」11,3-12. キリスト教における家については、ブルース・マリーナ他著(大貫隆監訳)『共観福音書の社会学的注解』新教出版社 2001年、117f.,205f.等。

れて、彼らは迫害されたと考えられる。しかしながら、後に皇帝はキリスト教が家族ぐるみの宗教であることの経済的効果に気づき、それを公認するに至るのである（後述）。

以上の諸考察を踏まえて、では何故「エトルスキ」宗教はキリスト教に敗れたか、その原因を追究する。モンテローロが指摘するように、臆ト術が他の色々な異教の攻撃にあつてすでに弱体化していたとしても、他の異教自体もキリスト教に打倒された以上、「エトルスキ」宗教そのものに生き残りを阻む何か特別な要因があったのかどうかは問われよう。

まず「エトルスキ」宗教の民間への普及度が問題になる。すでにエトルスキの全盛期においてさえ、特有の神々の体系と祭礼・儀式を固持するこの宗教が、それぞれ独自の伝来の神々を信奉するイタリア諸民族の間に浸透することは殆どなかったと考えて間違いない。エトルスキ文化の衰退期における宿命論は、興隆期のローマ帝国には無用だった。とすれば帝政期においてはなおさら、「エトルスキ」の宗教がイタリア各地ましてや属州で受け入れられたとは想像できない。帝国各地で活躍した「エトルスキ」の臆ト師は、エトルスキ宗教の教義を説き信仰を勧める宣教師ではなく、公務を円滑に遂行するための国家・地方公務員であり、官吏としてその場限りの占いに専念した。あるいは私的占い師として民間で占いを商売とする臆ト師もいた。彼らの公的・私的活動によって「エトルスキ」宗教の中核となる神々への信仰そのものが、当局および民間に浸透したとは信じられない。そもそも本来のエトルスキの神々は、2世紀までに完全に姿を消していたか、少なくともローマ化されていたのである。

仮に帝国各地の臆ト師が「エトルスキ」の宗教を布教し、その教義の宣伝に力を注いだとしても、<sup>(100)</sup>彼らの神々への信仰を広めるのは困難だったと思われる。というのは、日々の生活の安泰や救いを求める一般住民にとって、その教義は占いによる一時的な気休めをもたらしたにせよ、永続的な慰めや癒しを与えるものではなく、しかも臆ト師は、病人を治療するなどの医療活動<sup>(101)</sup>あるいは隣人愛に基づく支援<sup>(102)</sup>は多分しなかったと推察されるから。とりわけいわゆる3世紀の危機以来、一般民衆はさまざまな不安を抱えており、専制君主の強圧的支配下では日常生活の中で多くの不平・不満を持っていたに違いない。かかる閉塞状況の中で何らかの救いを得るには、そのような力を有すると信じられた最高の神に加

(99) Guyot / Klein, II, 140ff.は迫害の原因に関する文献史料を7つに分類して収録している： 無神論、国家からの離反、伝統に対する敵対、あらゆる不幸の原因、低い社会的地位、テュエステスの食事とオイディプスの結合、ろば礼拝。Cf. Jossa, 46,110ff.,145 ; G. de Vos, ' Popular Graeco-Roman responses to Christianity ', in : *Christian World*, II,871ff. ただし Vos, 884 によれば、キリスト教に対する「反社会的」というギリシア・ローマ側の非難の多くは、「社会を脅かすと認定された者たちに紋切り型のラベルを張った非難と見なすべきである」。

(100) R. Stark, *One True God. Historical Consequences of Monotheism*, Princeton and Oxford, 2001,42ff. によれば、一般に多神教は宣教を行わない。これに対してキリスト教は、新しい帰依者の獲得を目指す宣教の宗教であり、信仰の宗教だった (K. Hopkins, *A World Full of Gods*, London 1999, 82)。もっとも Hopkins はキリスト教を多神教と捉える。キリスト教の多神教的要素については ( West, 22ff. ; M. Frede, ' Monotheism and Pagan Philosophy in Late Antiquity ' ; in : *Pagan Monotheism*, 60)。

(101) 治癒神としてのイエスについては、山形孝夫『治癒神イエスの誕生』(1986年 小学館) 参照。S. Mitchell, ' The Cults of Hypsistos between Pagans, Jews, and Christians ' ; in : *Pagan Monotheism*, 106 によれば、Theos Hypsistos も病気や負傷を持つ信者の祈りを受け容れた。

(102) Piepenbrink, 252 : 医療行為は「キリスト教共同体の特別な機制」だった。

護を求める以外になす術はなかったであろう。

ところが本来のエトルスキの神々の体系には、帰依すべき絶対的な至高神 = 「君主制的単一神」<sup>(103)</sup>は存在しなかった。主神とされるティン／ティニアには得体のしれない上位の「隠れた神々」があり、また「エトルリアの主神」とされたウォルトゥムナは既に数百年も前にローマに移管されており、今や単なる一神格に過ぎなかった<sup>(104)</sup>。さらに教祖とされたタゲスは、その機能・性格がどのように想定されたにせよ、少なくとも最高権威を有する神でなかったことは確実である。タゲスは本来の伝説では単に教義の伝達者だったのであり、彼の教祖としての性格は、キリスト教との対決が熾烈になって『エトルスキ教典』が拡充された時期に強調されたと考定される。この時でさえタゲスは<sup>(105)</sup>キリストと比較されるようなただ一人の絶対的存在ではなく、ローマ皇帝により至高神とは認定されなかった<sup>(106)</sup>。コンスタンティヌス帝にとってさえ、最高神は太陽神アポロであった<sup>(107)</sup>。多神教から一神教への傾斜が時代の趨勢であり、「エトルスキ」宗教にも一神教的要素が認められる<sup>(108)</sup>にしても、信者は神々への信仰によって救われるのではなく、ただ占いによってのみ窺い知りうる神意に唯々諾々と従うしかなかったのである。「エトルスキ」宗教には、一定の犠牲を行えば死後神になるという教えがあったが、この教えによって人心を根底から掌握することは不可能だったと考えられる<sup>(109)</sup>。

以上のようなわけで、「エトルスキ」宗教の信者は、キリスト教徒と対決する時期には殆ど臆卜師だけに限定されており、キリスト教の場合のように自分たちの信仰を護り広げるために結束して教会を建てたり<sup>(110)</sup>、貧しい人々を扶助したりすることはなく、その結果、民間における彼らの組織力は皆無だった。従ってまた、布教態勢も全く整っていなかったと断定してよい。公的な卜占を担当する臆卜師は「皇帝の臆卜師」であれ「60人臆卜師団」であれ「都市の臆卜師」であれ、帝国や都市の官吏として公権力に奉仕しているのであって、「エトルスキ」宗教の普及のために主体的に行動する政治的権限も宗教的権威も持たなかった上、他の宗教をも許容したのである<sup>(111)</sup>。

さらに前項(e)で考察したように、帝国中に散在する臆卜師の家では、(エトルリアの状況はどうであったにせよ)「エトルスキ」宗教が家族全員に信奉されたとは考えられない。その上、臆卜師の家族の戸数もキリスト教徒の戸数にと比較してはるかに少数だった。次

---

(103) Cf. 西谷幸介「多神論・単一神論・唯一神論」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』18(2000年)、50, 60ff.

(104) Voltumna については、G. Radke, *Die Götter Altitaliens*, Münster 1979, 317ff.

(105) 帝政期におけるタゲスの評価については、Montero, *Politica*, 93ff.

(106) 2世紀における国家最高神はJupiter Optimus Maximus だった (J. Beaujeu, 'La religion de la classe sénatoriale à l'époque des Antonins', in : *Hommage*, 59f.)

(107) R. Turcan, 'Images solaires dans le *Panegyrique*', in : *Hommage*, 697-706.

(108) Cf. Briquel, *Chrétiens*, 148f.; Pfiffig, *Religion*, 15ff.

(109) Pfiffig, *Religion*, 178f.

(110) ユリアヌスにはキリスト教をまねて異教の教会機構を建設する計画があった (Geffcken, 131).

(111) Cf. Beard, l. 42 「経験も信仰も不信仰も個人の行動・態度ないし自己認識を規定するのに、何ら特に特権的な役割を持たなかった」。属州ではミトラ神の礼拝を行う臆卜師もいた (Haack, 170ff.)。

のような推算が可能である。「皇帝の臍卜師」は数人、せいぜい10人程度、「60人臍卜師団」の定員は60人、「都市の臍卜師」の人数は、ウルソの都市制度では二人官と複数（多分二人）のアエディリスのそれぞれに一人ずつ計4人の臍卜師がおり、かかる規模の地方自治都市が帝国全体に500あったとして計2000人、つまり臍卜師全員を合わせても2100人足らずであり、家族の人数はざっと1万人（自治都市が1000あったとしても臍卜師全員で4000人、家族の人数は2万人）である。これに対して、キリスト教徒の人数は200年ころに20万人はいたと推定され<sup>(112)</sup>、しかも家父長制の下にある彼らの家では家族全員が神を信じていた。さらにキリスト教の教義はその付加価値により他の家にも伝えられ受け容れられる可能性が大であり<sup>(113)</sup>、事実それは急速に帝国中に広まり、300年ころには約630万人（全人口の約10%）に達したのである。

このようなキリスト教徒の家の制度とその増加は、ディオクレティアヌスが専制的支配体制を維持するため税制を改革し *capitatio-jugatio* の制度を導入して以来<sup>(114)</sup>、帝国の財源として非常に重要になったはずである。何故なら、かかる人頭税と地租を査定する基礎となる社会的単位は、実質的に家であったが、キリスト教徒の家族は、同じ神への信仰という絆で結ばれ、逃散等による家族の離散・崩壊の危険性が他よりは低く見積もられ、「皇帝のものは皇帝に返す」<sup>(115)</sup> ことを宗としたので、このような家からは、確実な税収が見込まれたであろうから。キリスト教徒を迫害しその家を破壊させれば、彼らの数が増えれば増えるほど、帝国にとって経済的により大きな損失をもたらすことは明白だった。とすれば、彼らを財源として確保するには、迫害をやめてキリスト教を公認するのが最善の策であったろう。たとえキリスト教公認の結果「エトルスキ」の臍卜師が大打撃を受けその家が潰れたとしても、帝国に与える財政的損失は微々たるものであった。

さらにコンスタンティヌス以後、キリスト教の家庭内における息子の道義的独立性が進行すると<sup>(116)</sup>、息子は父が異教徒であっても躊躇することなく、キリスト教に改宗できるようになったに違いない。こうしてキリスト教徒の人口は、テオドシウスの頃には全人口の半数に達した。

## まとめ

「エトルスキ」の宗教・ト占術は、国政運営上そのト占によって神意を察知し手当を講ずる技術が不可欠と考えられた限り、そしてまたキリスト教に対抗する神学的手段であり

---

(112) キリスト教徒の人口については、Th.M. Finn, 'Mission and Expansion', in: *Christian World*, , 296.

(113) Stark, 60: 信仰は家族と友人の結びつきを通して広まった。

(114) F. de Martino, *Storia economica di Roma antica*, II, Firenze 1979, 431ff.; Th.M. Fellmeth, *Pecunia non olet. Die Wirtschaft der antiken Welt*, 168ff.; M.ロストフツェフ[著] 坂口明[訳] 『ローマ帝国社会経済史』下（東洋経済新報社 2001年）、728ff.

(115) 「マタ」17-22; 「ルカ」20, 21-26; 「ロマ」13, 6-7; Iustinus, *apol.*, I 17.

(116) K. Cooper, *The Fall of the Roman Household*, Cambridge 2007, 23ff.



えた限り、ローマ帝国によって活用された。しかし皇帝が専制的支配体制を維持・強化するために財源を確保し、そして人心の収攬を図る最も効果的な手段として宗教を利用しようとした時、臍卜師とその家族の数は、キリスト教とのそれとは比較にならないほど少なく、しかも「エトルスキ」宗教は帝国各地に普及しておらず組織力もなく布教態勢も整っていなかった。従ってそれは、上記の目的を達成するには全然役に立たないことが判明して見切りを付けられた。これに対しキリスト教には、「エトルスキ」宗教に固有の欠陥や阻止的要因はなく、逆にこれに欠けていた諸々の利点があり、急速に信徒教が増加した。キリスト教が家を基盤とする宗教だったので、より確実に税収が見込まれる考えた皇帝は、とりあえずそれを公認した。そして最終的に帝國統治に最適の宗教としてキリスト教が、唯一の国教とされたのである。排他的一神教であるキリスト教の国教化により、「エトルスキ」宗教を含む異教・異端は全て禁止され、「皇帝の臍卜師」や「60人臍卜師団」は消滅した。しかし「都市の臍卜師」や私的臍卜師は当分の間まだ存続する余地があった。この時点でどの異教もキリスト教に立ち向かう力はなく、しかも排斥され衰亡したのである。